

# 道後温泉活性化計画

平成 27 年 5 月

# 目次

	第1章 計画の目的と位置づけ・・・・・・・・・・・・・1
	1.1 計画の目的
	1.2 計画エリア
	1.3 計画期間
	第2章 現状と課題・・・・・・・・・・・・・4
	2.1 道後温泉地区の現状
	2.2 取り組むべき課題
	第3章 計画策定のプロセス・・・・・・・・・・・・・25
	第4章 活性化基本方針・・・・・・・・・・・・・30
	4.1 道後温泉地区の将来像
	4.2 将来像に導く5つの環（わ）
	4.3 道後温泉活性化の基本方針
	第5章 活性化計画・・・・・・・・・・・・・34
	5.1 全体計画
	5.2 重点整備エリア
	5.3 駐車場・駐輪場
	5.4 宿泊施設等耐震改修に伴う景観づくり



## 第1章 計画の目的と位置づけ

### 1.1 計画の目的

道後温泉地区は、日本最古の温泉といわれる歴史や文化性の高い地区で、旅館やホテル・店舗などで商業利用されている一方で、地域住民が住む居住地でもある。道後温泉本館は、地区のシンボルというべき存在で、平成6年12月には国の重要文化財に指定され、道後温泉椿の湯とあわせ年間100万人を超える入浴客を誇る松山市最大の観光資源である。平成21年に発行された「ミシュラン・グリーンガイド・ジャポン」では、道後温泉本館は最高位の三ツ星の評価を受け、国内だけでなく海外からも高く評価されている。

平成11年のしまなみ海道の開通、平成21年末から平成23年末の年末に、NHKスペシャルドラマ『坂の上の雲』の放映などにより、道後温泉の旅館宿泊者数は一時的に増加した時期もみられたが、観光地間競争の激化や旅行形態の変化により道後温泉の宿泊者数は年々減少傾向にあり、現在は約80万人で推移している。さらに、今後、道後温泉本館の長期間にわたる保存修復工事を控え、地域経済に大きな影響を与えるものと懸念されている。

そのため、道後温泉地区の活性化に早急に取り組むことが求められており、平成24年5月設置の「松山市道後温泉活性化計画審議会」において、活性化計画や総合的な対策等を取りまとめており、平成25年1月に、本館保存修復時の入浴客の受け皿を椿の湯に整備する方針の答申がなされ、平成29年度開催のえひめ国体までに椿の湯整備を目指している。また、一遍上人誕生の地である宝厳寺焼失（平成25年8月）の後、道後上人坂再生整備協議会が設立され、宝厳寺再建と上人坂再生に向けた動きがスタートし、このほか、旅館・ホテルなどの耐震化の動きもみられる。こうしたことから、行政と民間が協働して道後温泉地区の活性化に取り組むため「道後温泉活性化計画」を策定する。

なお、計画策定にあたっては、国や県の方針・計画並びに松山市における上位計画や関連計画との整合性を踏まえるものとする。

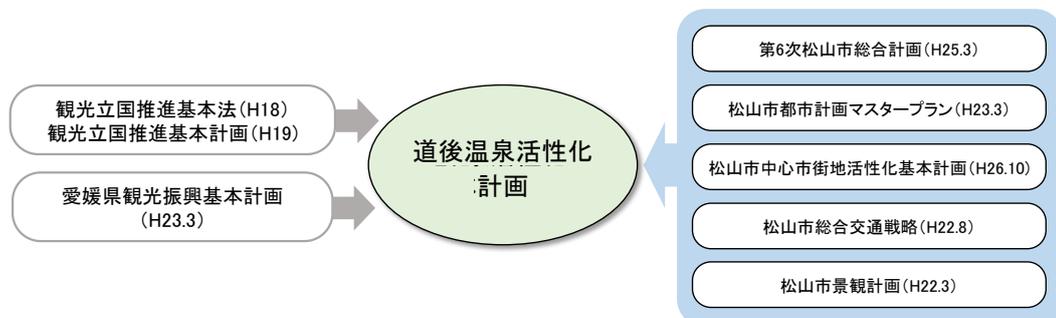


図1 計画の位置づけ

## 1.2 計画エリア

道後温泉地区の範囲は、道後温泉本館を中心として北側の松山神社、東側の石手寺、南側の道後公園で囲まれる東西約1.5km、南北約1.5kmの二等辺三角形のエリアを対象とする。

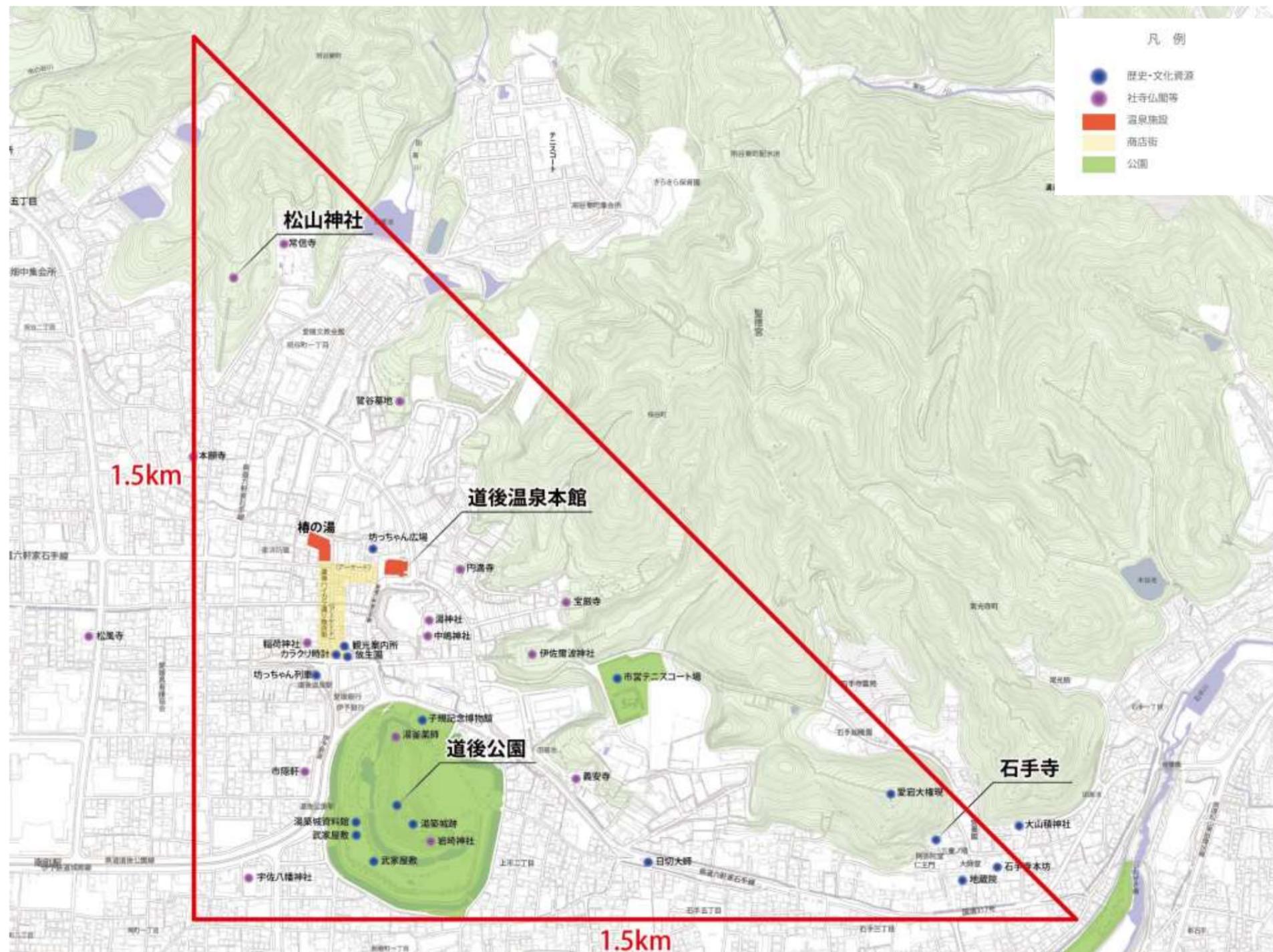


図2 道後温泉地区の範囲

### 1.3 計画期間

計画期間としては、平成27年度を初年度とし、道後温泉本館130周年を迎える平成36年度までの10ヵ年計画とする。そのなかで、えひめ国体を迎える平成29年度までの3ヵ年を短期、平成30年度から東京オリンピック開催の平成32年度までを中期、それ以降の平成36年度までを長期として、3段階に分けて計画推進を行う。なお、それ以降を将来として考えていく。

なお、短期終了時点で、事業進捗及び再精査を行うものとする。



図3 計画期間



## 第2章 現状と課題

### 2.1 道後温泉地区の現状

#### (1) 道後温泉の歴史

日本最古の温泉といわれる道後温泉は、飛鳥時代では三津が百済・新羅など海外とを結ぶ海路の要衝であったため大和朝廷との関係が深く景行天皇をはじめ聖徳太子、舒明天皇、斉明天皇、天智天皇（日本書紀・伊予国風土記逸文）など多くの皇族の来浴が伝えられている。

郷土地誌『予陽郡郷俚諺集』には、足を痛めた白鷺が湧き出る温泉で傷を癒したという「白鷺伝説」が、伊予国風土記逸文には、大国主命が病気の少彦名命を道後の湯で温めたところ、元気を取り戻し石の上で踊り出したという伝説があり、その石は、本館の北側に「玉の石」として奉られている。

中世・鎌倉時代の建武年間には、伊予国の豪族河野氏が現在の道後公園に湯築城を築いた。河野通信の孫で時宗の開祖・一遍上人が宝厳寺で誕生したのもこの時代であり、最後に伊予に立ち寄った1288年、温泉の湯釜の宝珠に「南無阿弥陀仏」の六文字を書いたと伝えられ、現在でも「湯釜薬師」として祭られ道後温泉の貴重な財産となっている。

江戸時代には、初代藩主松平定行公の時から、温泉建屋が湯気による腐食のため改築が繰り返され、第4代藩主松平定直公の時に大幅な改築がおこなわれ、一、二、三の湯、養生湯、馬湯が整えられ入浴客の増加に対応した。

現在の本館神の湯は、道後湯之町初代町長の伊佐庭如矢が、100年後の道後の繁栄を見据え、幾多の苦難を乗り越えて明治27年に完成したもので、その後、明治32年の又新殿の建築、大正13年の養生湯の改築、昭和10年の改造等を経て今日の姿となった。

設計は松山城大工の坂本又八郎で、大屋根の中央にギヤマンを使用した塔屋（振鷺閣）を載せ、その上には道後温泉ゆかりの白鷺が据えられ、トラス構造を用いた壮麗な三層楼の本館が建設された。

また、伊佐庭如矢は道後温泉の振興策として、明治28年、一番町駅～道後駅～三津口（古町）へと結ぶ道後鉄道を完成させるとともに、荒廃していた県立道後公園を借受け、桜やツツジなどを植え、築山や内濠をめぐらせ回遊式庭園を整備するなど、道後の繁栄の礎を築いた。

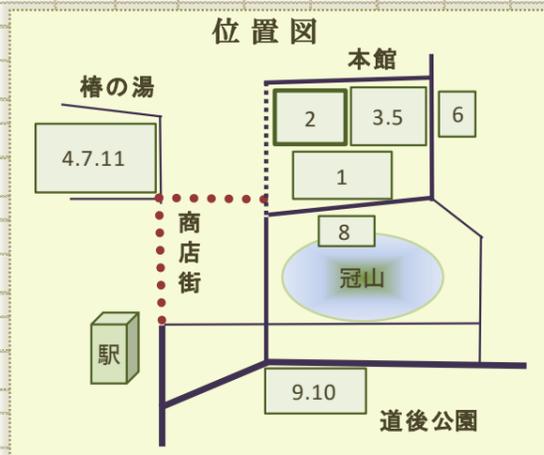
道後温泉の経営は、明治22年の町制施行より温泉郡道後村から分離し道後湯之町となっていた。その後、道後湯之町は松山市の合併促進を受け昭和19年4月、道後温泉並びに温泉に付属する一切の財産について財産区を設けることを条件として松山市に合併するが、温泉センターの経営不振などにより昭和41年財産区が廃止され、市の企業会計として運営されることとなる。

表 1 道後温泉建物略年表

道後温泉建物略年表

年号	明治										大正				昭和										平成							
	1	5	10	15	20	25	30	35	40	44	1	5	10	14	1	5	10	15	20	25	30	35	40	45	50	55	60	1	5	10	15	20
西暦	1868	72	77	82	87	92	97	1902	7	11	12	16	21	25	26	30	35	40	45	50	55	60	65	70	75	80	85	89	93	98	2003	8
行政	道後村 (温泉土地建物は国所有)										M23 道後湯之町				S19 松山市																	
経営権・所管	明王院⇒M5松山縣,M5石鐵縣,M6愛媛縣支配の下、湯之町四組 M8源泉社										伊佐庭如矢M23-34				T12敷地: S2岩崎一高 国⇒町										S41財産区廃止							

位置	名称	場所	略年表																																								
1	養生湯	本館南棟	天保5 1835										二階建 M25				改修・浴槽改築(第5,6室) T13				神の湯女子浴室となる S29																						
2	神の湯本館	現在と同じ	二階建(一階3室) M5				三層楼(一階3室) M27				曳移転改修(一階男女2室) S10 浴槽改修、事務棟増築										銅板葺屋根 S44					浴槽改修 H10																	
3	新湯	現霊の湯	三層楼 M11																																								
4	松湯・薬湯	現榊の湯	M25																																								
5	又新殿・霊の湯	現在と同じ	M32										浴室拡張・浴槽改築 S15										霊の湯女子室(RC造)増築 S36 S44					霊の湯男子室(RC造)増築 S61															
6	新湯 <small>通称:神の湯第七・八室</small>	振露園(現フナダP)	T3.9.1 男女二浴室増設										鮎田家と土地交換し「鷺の湯」に移る																														
7	西湯・砂湯	現榊の湯	T11										砂湯を「鳩の湯」とする S26 S37 休業																														
8	鷺の湯	冠山北麓	S2										温泉センター(S39~43) S38																														
9	新温泉	子規博	S23										休-再開 S 40.43 S54										S56子規博																				
10	しらさぎ湯	子規博	S25										進駐軍用 S25										休-廃止 S43 S54										S56子規博										
11	榊の湯	現榊の湯	S28										増設 (S28国体開催)										改築 S59																				
12	牛馬湯		S25 町の西郊に移す																																								



資料/松山市

## (2) 観光資源の現状

### ① 主な観光資源の分布状況

#### 1) 道後温泉本館

道後温泉は、有馬温泉、白浜温泉と並ぶ日本三古湯の一つで、「日本書紀」、「源氏物語」など様々な文献にも登場し、大国主命が少彦名命の病を治した伝説や聖徳太子の来浴などが伝えられている。

明治27年、三層楼の壮麗な本館が建造された。改築100年を迎えた平成6年12月には、国の重要文化財の指定を受けた。

平成21年に発行された「ミシュラン・グリーンガイド・ジャポン」では、最高位の三ツ星が与えられ、海外からも高い評価を受けている。

#### 2) 道後温泉・椿の湯

昭和28年「第8回国体」が松山で開催されたときに新設された。その後、昭和59年に改築され現在に至り、市民の湯として親しまれている。

596年、聖徳太子が行啓されたとき、椿が枝をさしかわすように生い茂っている当時の温泉郷の見事な光景を、まるで寿国にいるようであると称え、椿の湯はこの聖徳太子のことばに起源をもつ。

#### 3) 伊佐爾波神社

国の重要文化財の指定を受けている日本三大八幡造りの社殿がある。神殿は、江戸時代初期に松山藩松平家三代藩主・松平定長が流鏑馬の成功を祈願し、成就したことからそのお礼として建立された。楼門、回廊、幣殿、本殿から成り、回廊には絵馬や奉納額が掛けられており、22面の和算額は日本の数学の発展過程を示す貴重なものである。

#### 4) 湯神社

景行天皇の勅命により建てられたといわれ、地震で温泉が止まったとき湯神社で湯祈禱が行われ、再び湧出が始まったといわれており、その儀式は今も引き継がれている。冠山に鎮座し、今も昔も守り神として、地域住民に愛され守られ続けている。

#### 5) 中嶋神社

湯神社の境内社として、昭和32年に四国四県の菓子業者により創建されたお菓子の神を祀る神社である。

#### 6) 円満寺

境内の「湯の大地蔵」という一丈二尺（約3.67m）の大きな白塗りの地蔵尊は、火除け地蔵や延命地蔵として親しまれている。鮮やかに彩色されたこの地蔵尊は、道後温泉

に来た行基がクスノキの大木に彫ったものと伝えられている。1854年に道後温泉の湯が止まった時には、この地蔵に祈願し再び湯が湧き出たことから湯の大地蔵尊として信仰されている。

また、臥牛洞狂平の仮名詩碑は、日本で3基しかないという珍しい碑で、新体詩の源流とみられる。

#### 7) 宝厳寺

天智天皇の4年(665年)に建立されたとされる古寺で、鎌倉時代の後期(1292年)に時宗の寺として再興された。時宗を開いた一遍上人の誕生の地といわれ、愛媛県指定の史跡である。平成25年8月現在、本堂と庫裏が全焼し、所蔵されていた国の重要文化財である木造一遍上人立像が焼失した。現在、再建に向けて取り組んでいる。

#### 8) 常信寺

松平家初代藩主の松平定行公が江戸の東叡寺を模して、松山城の鬼門の鎮護のため建立した天台宗の寺で、境内には松平定行公の墓がある。

#### 9) 松山神社

徳川家康公と菅原道真公を祀っており、全国で7社しかない権現造りの社殿には、「三つ葉葵」の神紋がある。

#### 10) 義安寺

中世の豪族河野一族と縁が深い寺院である。境内には、河野家が領地を失った時、家臣一同が二君に仕えぬ誓いを立てて、自刃する前に水杯を交わしたと言われる「誓いの泉」が残っている。昭和30年頃まで、この辺りには「義安寺蛸」と呼ばれる大型のゲンジボタルが飛び交っており、その大きな蛸は、侍たちの精霊だったという伝説が残っている。

#### 11) 石手寺

四国八十八ヵ所霊場第51番札所で、境内には、国王の仁王門をはじめ、重要文化財である本堂、三重塔、訶梨帝母天堂などがある。

#### 12) 湯築城跡(道後公園)

中世伊予の守護河野氏の居城として、14世紀前半から16世紀後半にかけての250年間存続した城跡である。明治19年内務省の許可を受け県立道後植物園が設置され、明治21年には県立道後公園となるが、放置されていたため荒廃して、散策もできない状態だった。伊佐庭如矢が桜やツツジなどを植え、回遊式庭園として整備したことで、多くの

人が散策や花見に訪れ、松山地方の各学校の運動会や競馬、競車が催された。

昭和 28 年に県立道後動物園が開園したが、県立とべ動物園の開設に伴い廃止され、湯築城跡として国指定の史跡となり、公園整備が行われた。

### 13) 湯釜薬師

道後公園にある日本最古の石造りの湯釜である。直径が 166.7cm、高さが 157.6cm の円筒形で、かつては湯口として使われていた。天平勝宝年間(749～757 年)に作られ、正応元年(1288 年)、一遍上人の書で「南無阿弥陀仏」と彫られている。明治 27 年に伊佐庭如矢と坂本又八郎が本館を改築するまで、養生湯で使われていたが、昭和 25 年に今の場所に移され、湯釜薬師として祀られた。

### 14) 鷺谷墓地

道後の恩人・伊佐庭如矢や『坂の上の雲』の主人公・秋山好古、俳人・中村草田男、軍人作家・櫻井忠温などが眠る。

### 15) 子規記念博物館

人間正岡子規を顕彰する子規記念博物館は、正岡子規の世界を通して、より多くの人びとに松山や文学などについて親しみ、理解を深めるために、昭和 56 年に開設された文学系の博物館である。

### 16) カラクリ時計

道後温泉駅前の放生園にある「坊っちゃんカラクリ時計」は、平成 6 年、道後温泉本館改築百周年を記念して作られた。道後温泉本館の振鷺閣を模したもので、小説「坊っちゃん」の登場人物の 20 体の人形が次々に現れる。

### 17) 坊っちゃん列車

明治 21 年から 67 年間、市民の足として親しまれ、夏目漱石の小説「坊っちゃん」の主人公が乗ったことから、「坊っちゃん列車」という愛称で親しまれるようになった。当時は、蒸気機関車の特徴である黒い煙を吐き出し走っていたが、現在ではディーゼル車両として復元されている。

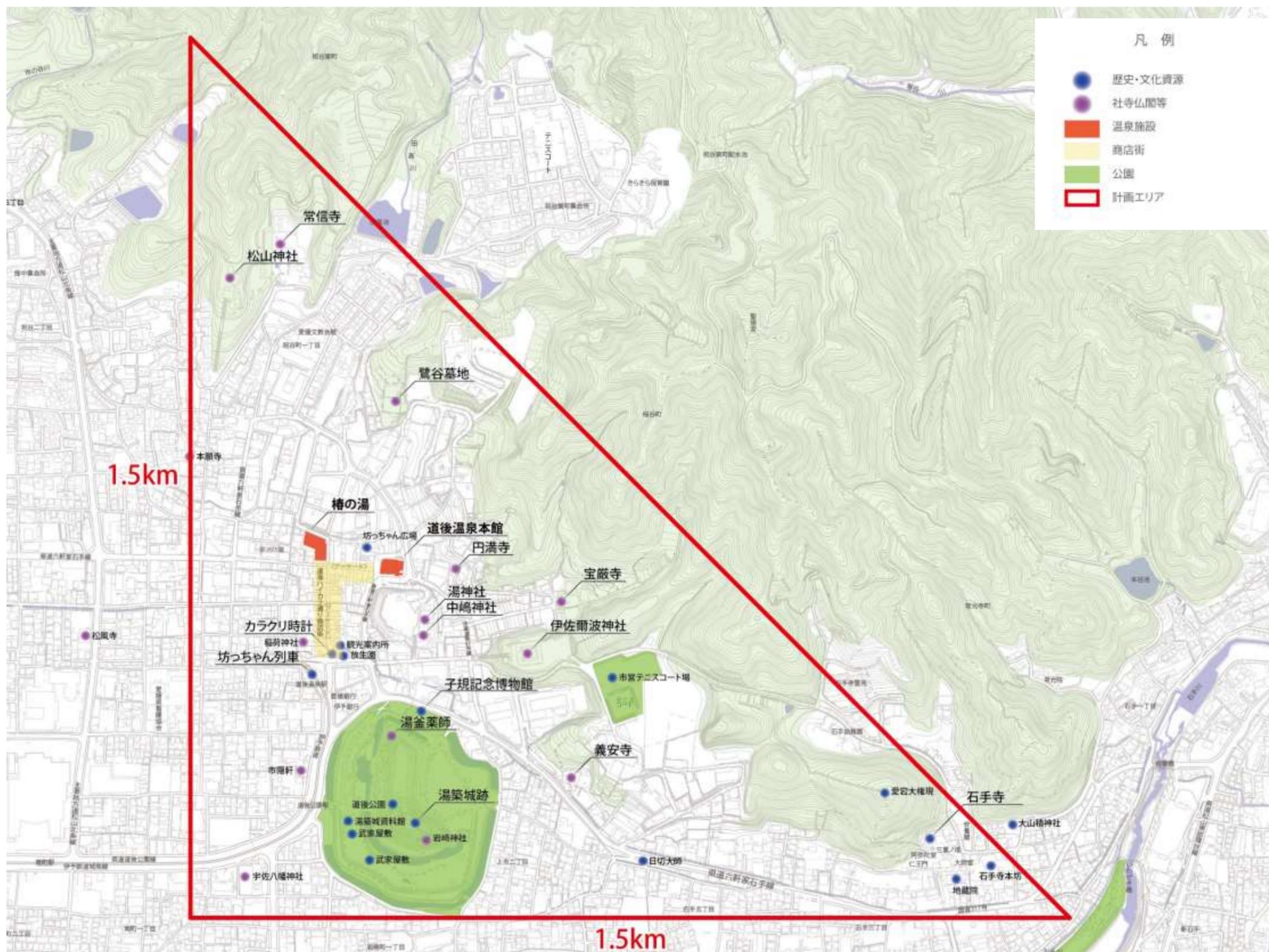


図4 道後温泉周辺の主な観光資源分布

② 道後温泉本館の保存修復

道後温泉本館は、明治に建築された近代和風建築であり、平成6年12月、神の湯本館、又新殿・霊の湯棟、南棟、玄関棟の4棟が国の重要文化財に指定された。平成8年7月、振鷲閣から打ち鳴らされる刻太鼓が、「残したい日本の音風景100選」に選ばれるとともに、平成19年3月には「美しい日本の歴史的風土100選」に松山城と共に選定された。また、平成21年2月に、経済産業省において「近代化産業遺産」に認定され、平成21年「ミシュラン・グリーンガイド・ジャポン」において、三ツ星に選定されている。しかし、明治27年の改築から120年が経過し、耐震化・老朽化対策が喫緊の課題となっている。

(明治27年当時の本館)

(現在の本館)



図5 道後温泉本館

道後温泉本館が保存修復工事により一部もしくは完全閉館となった場合、道後温泉地区のみならず松山市全体の入込観光客数の減少が危惧されている。

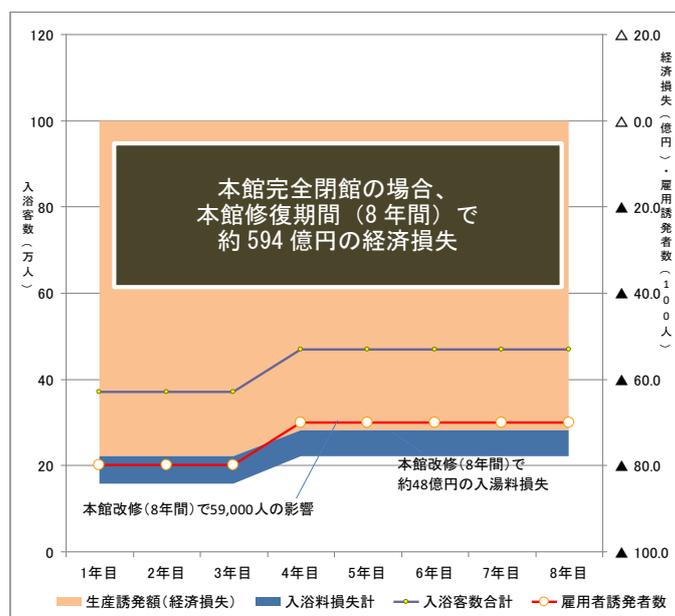


図6 道後温泉本館修復による損失額: 完全閉館時

資料/平成24年度道後温泉活性化計画検討

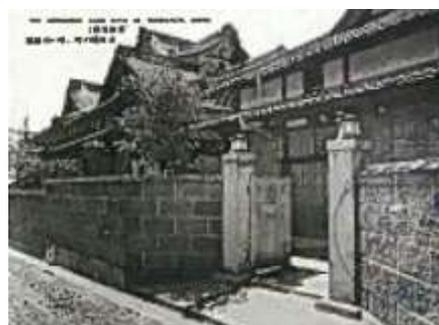
③ 椿の湯の整備

昭和28年秋、第8回国体が開催された松山市は、同年9月に道後温泉の「西湯」及び「砂湯」を改築し、「椿の湯」に統合や改称し全国から選手関係者ら1万人を迎えた。その後は、松山市民の湯として親しまれている椿の湯は、昭和59年に現在の建物に改築され、約30年が経過している。

そのような中、松山市では、道後温泉本館保存修復時における入浴客の受け皿となる代替施設として「椿の湯」の改築が最良であるとの「道後温泉活性化計画に関する第1次答申（平成25年1月30日）」を受け、現在、平成29年度開催のえひめ国体までの完成を目指し、椿の湯の西側敷地に新たな温泉施設を新設することを計画している。

(西湯) 大正11年～昭和26年

(砂湯) 大正11年～昭和26年



(椿の湯) 昭和28年～昭和58年

(鳩の湯) 昭和26年～昭和37年



(現在の椿の湯：正面) 昭和59年～現在

(現在の椿の湯：東面)



図7 椿の湯の変遷

資料／湯の町 道後 隅々案内

## ④ 宝巖寺の再建と上人坂の再生

宝巖寺は、寺伝では天智天皇4年(665年)、越智守興が誓願院として創建したとされている。正応5年(1292年)、寺は時宗の祖・一遍の弟にあたる仙阿によって再興され、時宗に改宗し、時宗十二派のうちの奥谷派本山となった。一遍は延応元年(1239年)、この寺の一角で誕生したとされている(異説もある)。建武元年(1334年)には得能通綱が「一遍上人御誕生旧跡碑」を坂の入り口に建立した(碑は1926年、境内に移築)。

平成25年8月10日、宝巖寺は、火災により本堂と庫裏が全焼し、所蔵されていた国の重要文化財である木造一遍上人立像が焼失した。その後、松山市教育委員会の定例会で、焼損した同市指定有形文化財(工芸品)の「懸仏および残欠」の指定を解除し、改めて「宝巖寺伝来懸仏残欠」および「宝巖寺伝来小仏」の名称で、市指定有形文化財(歴史資料)に指定されている。

その後、宝巖寺再建に向け檀家を中心に精力的に活動を行い、「道後上人坂再生整備協議会」を発足させ、平成26年9月、檀家総会において総事業費1億5千万円のうち8割にあたる約1億2千万円の寄付が集まったことが報告され、本堂などの再建計画が承認され、平成28年3月の宝巖寺完成を目指している。



図8 焼失前の宝巖寺

(松ヶ枝町時代：上人坂)



(現在：上人坂)



図9 上人坂の変遷

(3) 観光客の来訪状況

① 松山市入込観光客数・道後温泉宿泊者数

松山市の入込観光客数は、NHK スペシャルドラマ『坂の上の雲』や高速道路無料化の終了などの影響もあり一時的な増加はあるが、近年は減少傾向となっており、平成25年時点で約564万人となっている。また、道後温泉の宿泊者数は、しまなみ海道の開通による一時的な増加はみられたものの、平成25年時点で約82万人となっており、旅行形態の変化などによって減少傾向が続いているが、平成26年は「道後オンセナート2014」の開催などにより約88万人に増加している。

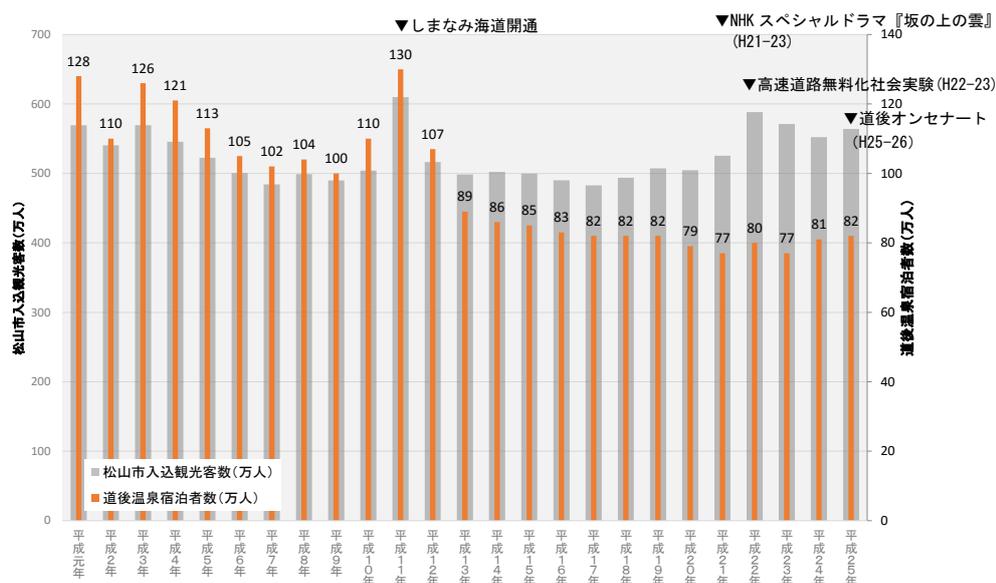


図 10 松山市入込観光客数・道後温泉宿泊者数の推移

資料/松山市 (平成25年)

② 道後温泉来街者の居住地

道後温泉来街者の約7割は愛媛県外であり、アンケート調査によると大阪、東京、広島からの来街者が多くなっている。一方、松山市内からは3割の来街があるものの、松山市を除く中予地区や東南予地区からの来街比率は少ない。

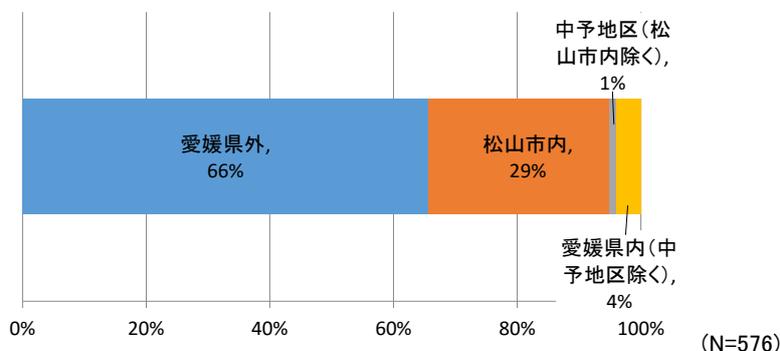


図 11 道後温泉来街者の居住地

資料/平成25年街頭アンケート調査結果 (松山市)

③ 来街者の回遊状況

各施設の滞在人数を示した下図をみると、来街者の多くは道後温泉駅や放生園からアーケード商店街を歩いて道後温泉本館周辺を歩くコースが一般的であり、周辺部の社寺や子規博、道後公園などへ足をのばす来街者は多くない。また、観光目的地は道後温泉本館周辺に限定され、周辺にある観光資源への回遊性は非常に乏しいことが分かる。

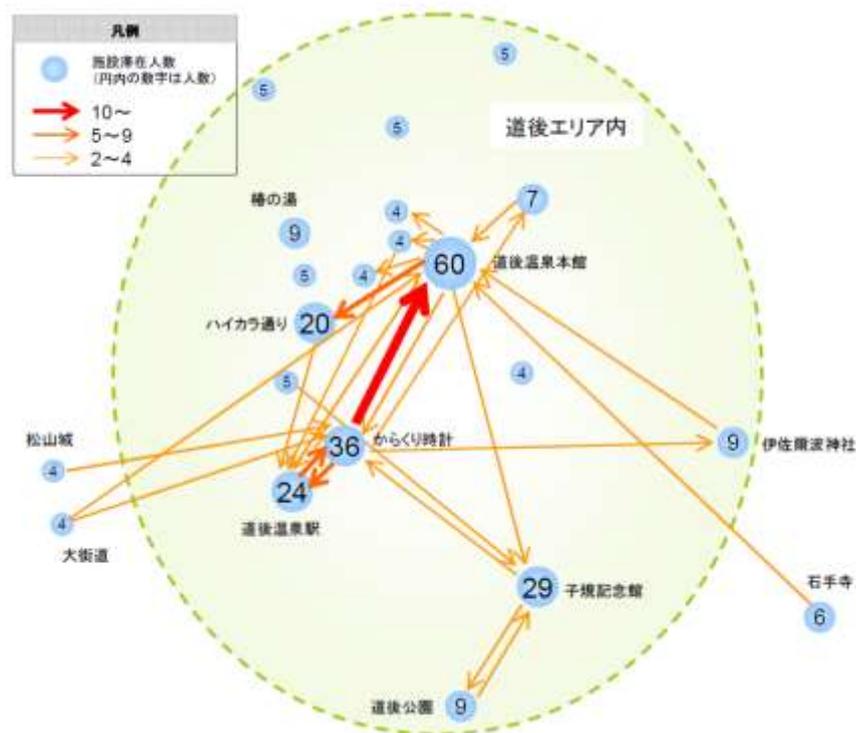


図 12 施設滞在人数と施設間流動

資料／平成 20 年回遊行動アンケート調査結果（愛媛大学）

④ 来街理由

観光旅行で訪れた人の来街理由は、「道後温泉本館建物が魅力的だったから」が最も多く65%を占める。この結果は、次いで多い「温泉に入ることが好きだから」や「商店街や街の雰囲気が好きだから」よりも大幅に高いことから、道後温泉本館に大きく依存した観光地であることがうかがえる。

そのため、本館保存修復工事期間中の観光客の来訪を維持するためには、商店街の魅力向上や観光スポットの充実など本館に依存しない活性化策が求められる。



図 13 道後温泉への来街理由

資料／平成 25 年街頭アンケート調査結果（松山市）

(4) 宿泊施設の状況

① 宿泊施設数の規模

道後温泉の旅館数は、平成元年から平成21年にかけて半減しており、それに伴い部屋数、収容人数ともに減少傾向にある。

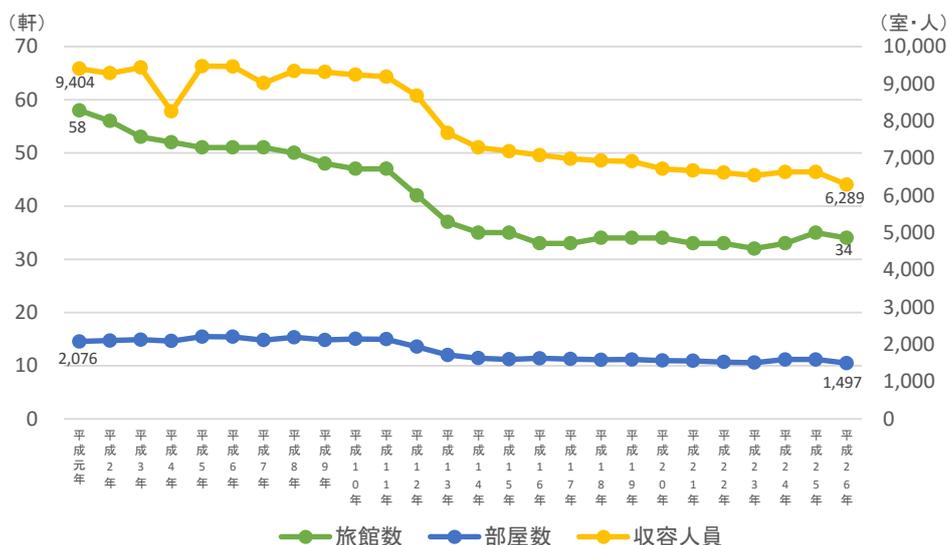


図 14 道後温泉の宿泊施設数の規模

資料/道後温泉旅館協同組合

(注) 同組合に加盟しているホテル・旅館の総計

② 宿泊者数と定員稼働率

道後温泉旅館の客室稼働率（定員稼働率）は30%台であるが、一般的な採算ラインは40%といわれていることから、旅館によっては厳しい経営環境におかれている。

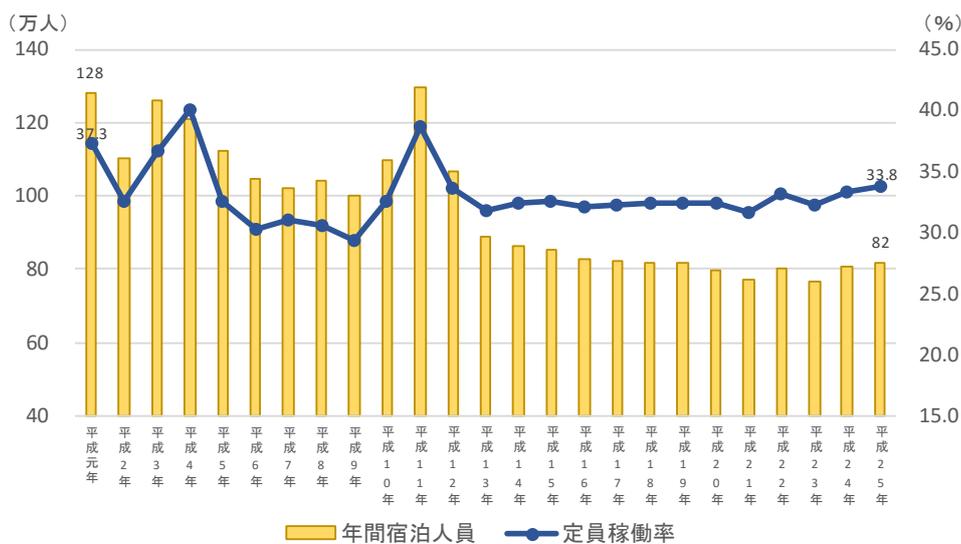


図 15 道後温泉の宿泊者数と定員稼働率

資料/道後温泉旅館協同組合

(5) 交通・駐車場の状況

① 主な交通手段

道後温泉地区への来街者の交通手段の割合は自家用車が55%と最も高い。そのため、観光交通対策としては、自家用車でアクセスを十分考慮した駐車対策や交通安全対策が必要とされる。

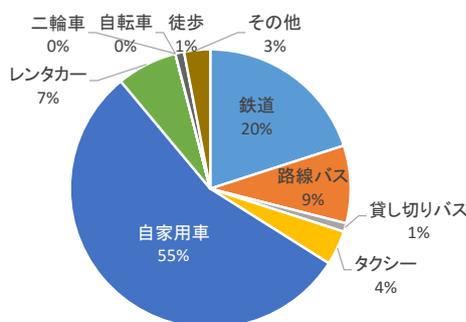


図 16 道後温泉地区までの代表交通手段

資料／平成 25 年度松山市

② 車両の流入状況

道後温泉地区は、戦災を免れたことから明治以降の街並みが残っており、狭い道路が多く、区域内の松山市道は、5m以上の幅員を有する道路がほとんどない。幹線道路としては県道六軒家石手線のみであり、交通処理や安全性の面で大きな課題がある。

県道六軒家石手線には、南からはホテル群に向かう観光交通が入り込み、北からは主要地方道松山北条線から県道六軒家石手線を通過し、石手方面に抜ける通過交通が流入し、観光交通の流出交通と相まって観光シーズン時にはしばしば渋滞を引き起こしている。

上人坂に向かう市道道後41号線は、この通過交通の抜け道として常態的に利用され、日交通量は約1,800台/日(H22)と多く、歩道のない一車線道路のため安全性の面に問題がある。

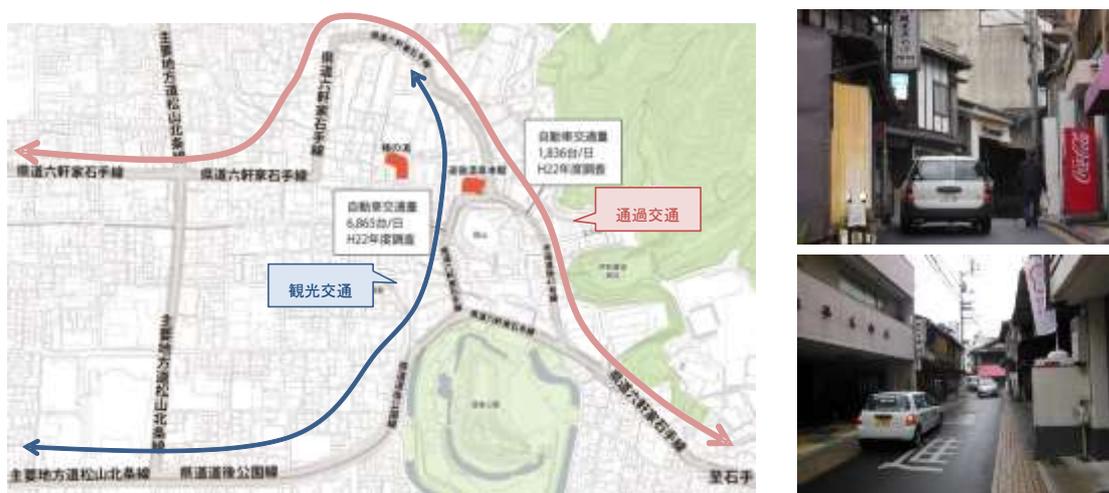


図 17 道後温泉地区の路線図（写真は市道道後41号線の車両の通行状況）

③ 駐車場の状況

来街者アンケートでは、宿泊観光客はホテル駐車場の利用が圧倒的であるが、市内客は本館から5分以内の民間駐車場の利用が多い。宿泊しない日帰り客の来街者も同様の傾向が強いと思われる。

現在整備されている公共駐車場（冠山、祝谷東、臨時駐車場）のうち、祝谷東駐車場と臨時駐車場は、本館までの距離が長くアクセス性の面で課題がある。また3つの駐車場とも急勾配の坂道があり、特に高齢者や身障者の移動の負担は大きい。



図 18 公共駐車場の位置

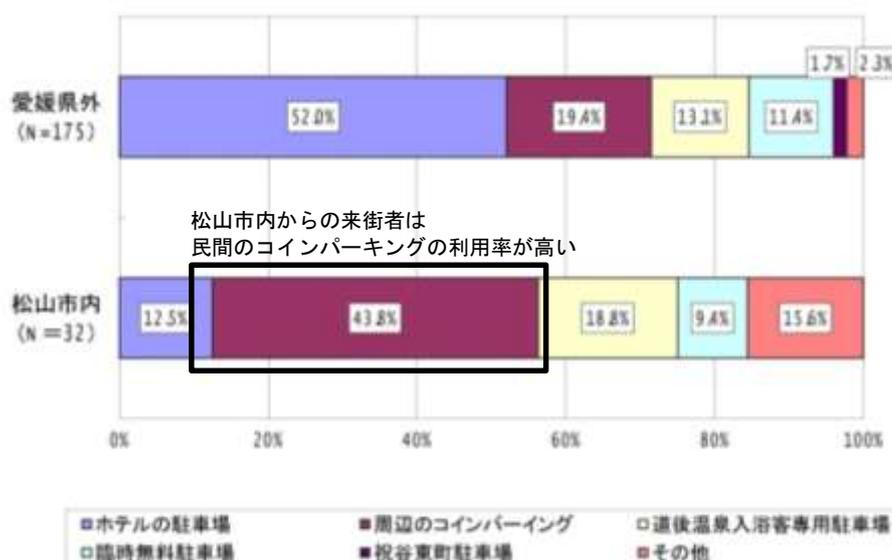


図 19 自家用車を利用した道後温泉地区への来街者の利用駐車場

資料/平成25年街頭アンケート調査結果 (松山市)

(6) 沿道景観・街区形成の状況

① 沿道景観の状況

道後温泉本館周辺及び道後温泉駅周辺では景観整備がされているが、椿の湯周辺や上人坂周辺では、雑然とした電線、統一性の無い看板が多く、また沿道建物や舗装も含めて統一的な景観が形成されていない。



図 20 上人坂(左)・椿の湯周辺(右)の沿道景観

② 道後商店街の状況

道後商店街およびその周辺は、木造建物が4割強と多く、建築年数も昭和57年以前の家屋や店舗が密集しており、火災や地震時の延焼のリスクが高い。また、避難路が乏しく緊急車両の通行も困難である。建物が密集しており建て替えは容易ではない。

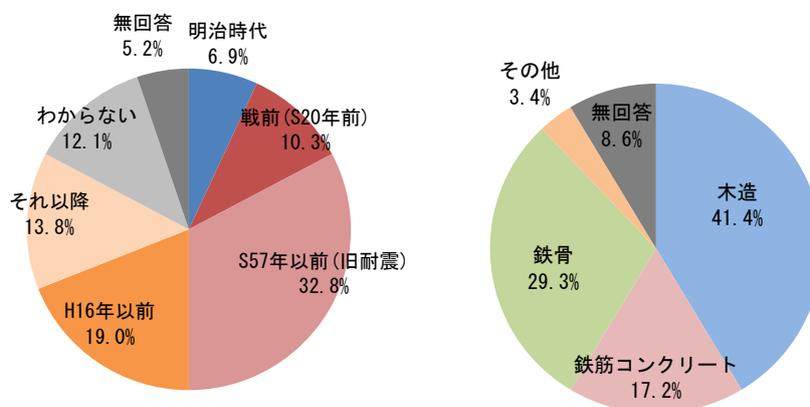


図 21 道後温泉商店街の「建物構造(左)」と「建築年数(右)」 (N=58)

資料/平成 26 年商店街アンケート調査結果 (松山市)

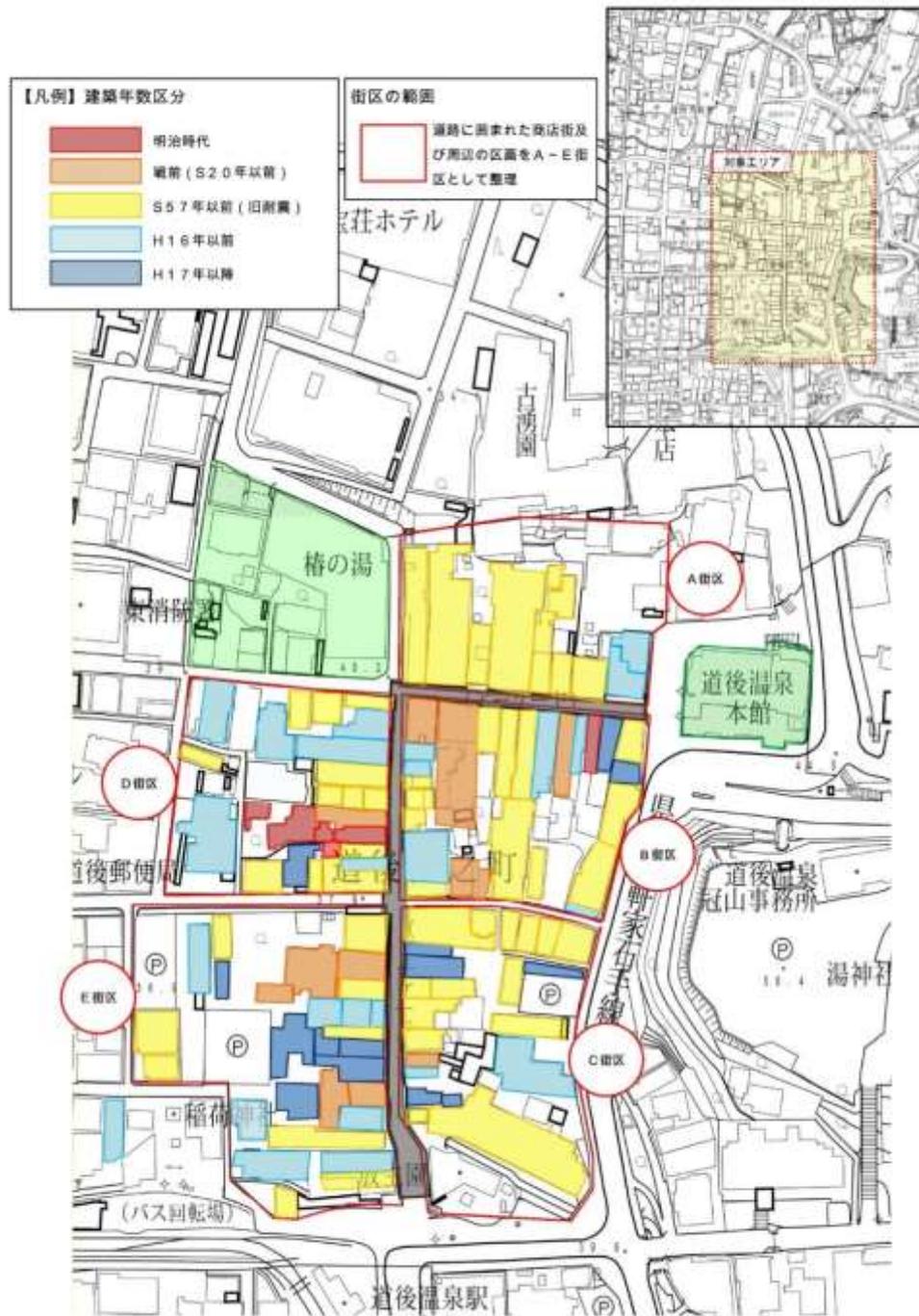


図 22 道後温泉商店街区の建物建築年数

資料／平成 26 年商店街アンケート調査結果（松山市）

## (7) 行事・イベントの開催状況

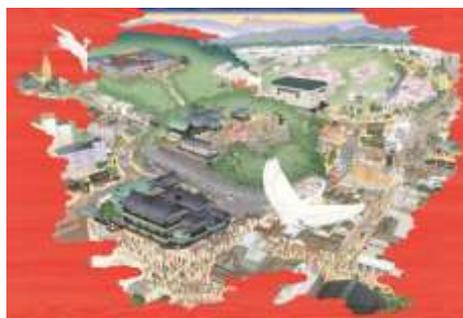
## ① 定期的な行事・イベントの開催

道後温泉では、初子祭、湯築市、道後温泉まつり、道後温泉夏まつり、道後温泉一番走り、湯あがり朝市等、年間を通して行事・イベントが開催されている。

特に、平成26年は、「道後オンセナート2014」、「瀬戸内・しまのわ2014」等、県外観光客誘致を目的としたイベントが開催され、道後温泉の観光宿泊者数増加に寄与している。平成29年には、えひめ国体の開催が決定していることから今後も継続的な魅力発信が求められる。

## (道後オンセナート2014)

道後温泉本館が、平成26年4月10日に改築120周年を迎えることを記念して、アートフェスティバル「道後オンセナート2014」が開催された。



## (霧の彫刻 / 中谷芙二子)



## (大影絵 / 道後夜話/ スティーブン・ムシン)



## (瀬戸内・しまのわ2014)

広島県と愛媛県が共同開催する、広島県10市町と愛媛県3市町の島しょ部及び臨海部を舞台とした観光振興イベント。会期は平成26年3月21日～10月26日の約7ヶ月で、400以上のイベントが実施された。実行委員や市町だけでなく、地域住民が主体となり、瀬戸内の魅力を活かした「民間企画イベント」を企画・運営している点が特徴。

会期終了後の現在も取り組みは継続されている。

## ② 今後開催予定の行事・イベント

平成27年以降、メモリアルイヤーが続く。特に、平成29年のえひめ国体(単独開催)、平成32年の東京オリンピック等のイベント時には、多くの県外客や外国人観光客の入込が予想される。

表2 過去のイベント開催状況と今後のイベント

年次	イベント
平成25年	・京都・広島・松山が国の新ゴールデンルートに決定
平成26年	・瀬戸内海国公立公園指定80周年 ・道後温泉本館改築120周年 ・四国八十八ヶ所霊場開創1,200年 ・道後オンセナート2014 ・瀬戸内しまのわ2014
平成27年	・高野山 開創1200年 ・夏目漱石 松山赴任120周年
平成28年	・夏目漱石没後100年 ・小説「坊っちゃん」創刊110周年
平成29年	・えひめ国体 ・夏目漱石 生誕150年 ・正岡子規 生誕150年 ・坂の上の雲ミュージアム開館10周年 ・俳句甲子園20回大会
平成30年	・明治維新150年 ・秋山真之 生誕150年
平成31年	・ラグビーワールドカップ
平成32年	・東京オリンピック・パラリンピック
平成36年	・道後温泉本館改築130周年

## 2.2 取り組むべき課題

道後温泉の歴史や観光資源の現状、並びに観光需要と観光事業者サービスなどから、今後の取り組むべき課題を整理する。

### (1) 街並み・風景

道後温泉地区にとって、街並みや風情は最大の魅力要素であるにも関わらず、本館周辺の特定箇所のみで景観整備に留まっていることから、道後温泉地区全体として魅力的な空間が形成されていない。

今後は、観光客の高齢化への対応や身障者等に配慮したバリアフリーなど、環境整備に留意しながら、魅力的な歩行空間の形成及び景観整備が必要である。

### (2) 交通アクセス性・回遊性

観光客の多くが公共駐車場を利用しているが、駐車場へのアクセス道路は急勾配で、バリアフリー対応となっていない。また、祝谷東および臨時駐車場については、本館・椿の湯へのアクセス距離が遠く利便性に欠け、歩道も無いため交通安全面で問題もみられることから、観光客の来訪満足度の低下を招いていることが推察される。そのため、道後温泉地区内の駐車場の適正配置を行うとともに、安全かつ快適な歩行者空間の確保が求められている。

滞在時間の拡大とともに道後温泉地区の消費活動に結びつくことから、今後は既存の観光資源の魅力創出や魅力的な歩行環境の整備とともに、滞留できる空間や休憩施設の整備、更には多様な主体と連携しながら様々な魅力創出を図り、外国人観光客も含めて分かりやすい情報を発信することが重要である。

### (3) 地域資源の活用

道後温泉地区内には、多くの歴史的観光資源が存在するものの、それらが有する潜在的な魅力を十分に引き出すことが出来ていない。特に、上人坂周辺は一遍上人にまつわる歴史的背景を有する地域であることから、宝厳寺再建にあわせて、それらの潜在的な魅力を引き出す仕掛け・取り組みが必要となる。

日本三大八幡造りの伊佐爾波神社、道後で最古の湯釜のある湯釜薬師、夏目漱石「坊っちゃん」で描かれた上人坂やかつての遊郭跡、更には北部の松山神社、常信寺、東部の石手寺など数多くの名所、旧跡が存在しているが、現状においては、多くの観光客は道後温泉本館のみの来訪が多く、回遊エリアは狭い。

#### (4) 賑わいの創出

##### ① 道後温泉本館の保存修復工事による経済損失

観光資源として道後温泉本館の魅力に依存している当温泉地において、今後の本館保存修復工事は、観光客減少に伴う旅館ホテルの減少や規模縮小等をはじめとして、大きな経済的ダメージを被ることが危惧されることから、代替施設となる椿の湯の新設、改修をはじめとした周辺施設の魅力の向上が求められている。

##### ② 消費誘発イベント等の必要性

商店街等での消費を誘発するイベントが少なく、周辺の観光施設が潜在的に有する魅力を十分に発信できていないとは言えない。本館の保存修復工事期間を見据え、より多様な客層に対して積極的な情報発信が求められている。

#### (5) 地域連携

木造住宅・店舗等が密集する地域が存在するとともに、緊急車両の通行できない区間もあるため、災害や火災への対応を想定した道路幅員の確保が必要となる。今後は、災害に強いまちづくりを推進するため、地域、大学、行政等が有機的に連携することが必要となる。

加えて、このような地域課題の解決を目的とした連携を軸に、今後の更なる地域活性化を意図したワークショップ、イベントの開催等の連携策の検討も併せて行うことが求められている。



## 第3章 計画策定のプロセス

道後温泉活性化計画の策定にあたっては、地域住民と協働で検討することを重視し、下図に示す複数のアプローチから道後温泉地区の活性化に向けた意見・アイデア等の収集や、計画案に対する意見を伺う場を設けた。



図 23 地域住民等からの意見収集方法

### (1) 都市計画設計提案競技

松山アーバンデザインセンター、東京大学復興デザイン研究体、愛媛大学防災情報研究センターが主催した「風景づくり夏の学校 2014<sup>1</sup>」では、道後温泉街をテーマに実施された。

30歳以下の大学生や若手実務者から、道後温泉の「移動風景の再生と展開<sup>2</sup>」をテーマに設計提案競技が行われ、出された提案は本計画のコンセプトや計画内容に一部反映した。また、市民参加による活性化検討の手法として、“道後まちづくりかるた<sup>3</sup>”のワークショップを実施した。



<sup>1</sup>風景づくり夏の学校とは、2006年から東京大学が中心となり、毎年夏に開催している産官学連携によるプログラムである。全国から集まった大学生や若手実務者が、対象地の風景づくりや地域活性化策等について、専門家からの助言等を参考に地域との対話も踏まえながら、夜を徹して様々なアイデアをとりまとめている。

<sup>2</sup>火災や地震といった道後温泉を取り巻く災害リスクと地域構造の変化を理解したうえで、お遍路さんをはじめ多くの旅人を癒しもてなしてきた外湯文化を育んできた街路や広場といった道後に固有の空間構造にもう一度目を向けることで、道後地区を中心とした移動風景を再生させていくための地域デザインの提案を募集した。

<sup>3</sup>絵札に道後の課題を解決するような活性化アイデアを書き、読まれた課題について各人が思うアイデアの札を取りながら意見交換を行う手法。「かるた」という媒体を通じて、道後のまちづくりに各個人が自発的に関わる環境・行動を創発することを目的とする。



道後かるたワークショップで出た主な意見・提案は以下の通りである。

■風景・街並み・通りに関すること

- ・ 天空の湯（冠山の足湯整備で本館改修をみる）
- ・ 坂の上の見晴らし場所の整備
- ・ 宝巖寺の夕焼けを望む広場
- ・ 桜、梅、桃などの植樹 など

■交通・回遊に関すること

- ・ フリンジパーキングの整備
- ・ 足湯電車の運行 など

■地域資源・滞在スポットに関すること

- ・ 芝居小屋、道後の今昔を伝えるミュージアム
- ・ 宝巖寺再建による新観光スポット
- ・ 足湯付き勉強場所（寺子屋）
- ・ 劇を見ながら入れる温泉
- ・ 道後でゲーム（道後のまちめぐりゲーム・スタンプラリー） など

■観光経済・観光PRに関すること

- ・ 椿石鹸、タオル、温泉まんじゅうなど温泉関連商品の開発
- ・ ゆっくり寛げるオープンカフェ・オープンテラス
- ・ 飲み歩きできる道後バル など

■地域連携・交流・その他に関すること

- ・ 地元大学との連携イベントの展開
- ・ 奥道後とのコラボ（湯の活用）
- ・ 地域のコミュニティ FM スタジオ
- ・ 自立した地域づくり、地域経営、資金づくり など

## (2) 道後温泉活性化懇談会

道後温泉活性化計画等の検討案について意見を伺うため、学識経験者、道後温泉旅館協同組合、道後商店街振興組合、道後温泉誇れるまちづくり推進協議会などの代表者が集まり、道後温泉活性化懇談会を平成25年度から定期的を開催した。懇談会での主な検討内容および意見は、以下の通りである。

### ■風景・街並み・通りに関すること

- ・ 動線をつなぐために緑を利用していくべき
- ・ 冠山は威圧感がある
- ・ 椿の湯改築のデザインのコンセプトとして歴史性の継承は外せない
- ・ 既存椿の湯は、商店街に対して角部分が見えていて、まちの一体感が全くない
- ・ まちの動線を活かしたまちづくりにしないといけない
- ・ 椿の湯の周囲で、さらに椿を活かすことにより素晴らしいものになる
- ・ 温泉地なので、夜景は重要ではないか

### ■交通・回遊に関すること

- ・ 石手寺も含めた大きな回遊をどのように作っていくか、上人坂のような場所で小さな路地をどのようにつくっていくか検討することが必要
- ・ 歩行者ネットワークは、“円”で一周まわれることが大事ではないか
- ・ 駐車場がないことは、リピーターの損失という意味では大きいのではないか
- ・ 駐車場と併せてサイン整備を行い、わかりやすい案内をすることが必要

### ■地域資源・滞在スポットに関すること

- ・ 道後公園が道後温泉とつながっているイメージを作ることが必要
- ・ 商店街にベンチや休憩所がないのがこのまちの大きな問題であり、広場空間があることが理想的
- ・ 100年先を見て、危機の本質を捉える事が大事。第二に、本館改修を契機として道後地域としての総合力を高めることが大事。第三に、歴史的価値観の見える化をすること

### ■観光経済・観光PRに関すること

- ・ 上人坂は地元の人が訪れたいくなるような施設を作るべき
- ・ 地元経済が潤うような仕組みを考える必要がある

### ■地域連携・交流・その他に関すること

- ・ 観光振興の観点から整理されているが、安全・安心の観点が抜けている
- ・ グローバル化への対応が必要

### (3) 道後温泉活性化ワークショップ

「道後温泉活性化計画審議会」において、道後温泉本館保存修復工事に向けて地域の意見を反映した取り組みや啓発等が重要であるとされており、総合的な対策を講じる一助とするため、愛媛大学が中心となり、地域の関係者等が参加するワークショップの開催やアンケートを実施した。平成24年度から3ヶ年、年平均5回程度開催した。道後温泉活性化ワークショップで出た主な意見・提案を整理すると以下の通りである。

#### ■風景・街並み・通りに関すること

- ・ 日本最古の道後温泉らしい和の景観をつくる、温泉地の風情を残す
- ・ 電線や電柱の地中化
- ・ 道沿いに木や四季折々の花を植樹
- ・ 冠山を元の椿の咲く丘に回帰
- ・ 宝巖寺、上人坂を再生整備し回遊性を向上

#### ■交通・回遊に関すること

- ・ 外国人にわかりやすいガイドやサインの整備
- ・ 砥部行きシャトルバスの運行

#### ■地域資源・滞在スポットに関すること

- ・ 本館改修工事見学をイベント化
- ・ 夏目漱石の顕彰施設整備
- ・ 冠山に展望露天風呂
- ・ 伊予絣、砥部焼、菊間瓦などの伝統工芸の紹介
- ・ 長期滞在体験型ツアーの実施（ウォーキング、サイクリングなど）
- ・ ガイドと行く道後健康ウォーキング
- ・ 道後スタンプラリーの開発
- ・ 温泉治療やスポーツリハビリができる施設整備
- ・ 湯治文化の再興

#### ■観光経済・観光PRに関すること

- ・ 工事の様子を定期的にネットで配信
- ・ ポイントカードや年間パスの開発、旅館・ホテル全体で使える入浴券を発行
- ・ 道後マルシェ、道後楽市楽座の実施
- ・ 道後をアートの街に

#### ■地域連携・交流・その他に関すること

- ・ 本館チャリティ募金や銘板の募集
- ・ 他市町との広域連携
- ・ 学生、シニアのまち歩きガイドの育成、教育
- ・ 大街道、銀天街などの商店街との連携

#### (4) 道後上人坂再生整備協議会

平成25年8月10日、重要文化財「木造一遍上人立像」を所蔵していた宝厳寺本堂が焼失したことを発端に立ち上げられたものであり、宝厳寺の再建に併せ、上人坂の再生をはじめ道後温泉活性化のまちづくりを推進することを目的に、宝厳寺に関わりをもつ団体、企業や学識経験者などで構成されている。

##### ① 上人坂全体での景観整備について

宝厳寺に向かう動線の整備や、歩行者の寛げる場所の配置、ファサードの整備などによって、「門前町」としての賑わいを再生させる工夫が、坂上に再建される宝厳寺に人を呼び込むことにつながる。一方で、坂下から向かうときに歩行者の視界に入る宝厳寺については、入口整備により、街との関係を強く感じることができると景観づくりが必要である。

##### ② 上人坂のゾーニングについて

上人坂を4つのゾーンに分け、整備方針を検討する。坂上・坂下には人の集まれる広さの公共スペースと人を惹きつける建物を配置する。沿道には門前町の風景として再生するため、建築物の整備に併せ、坂への石段整備や裏道への抜け道を新たに確保しながら、小規模の公開スペースを点在させる空間構成とする。

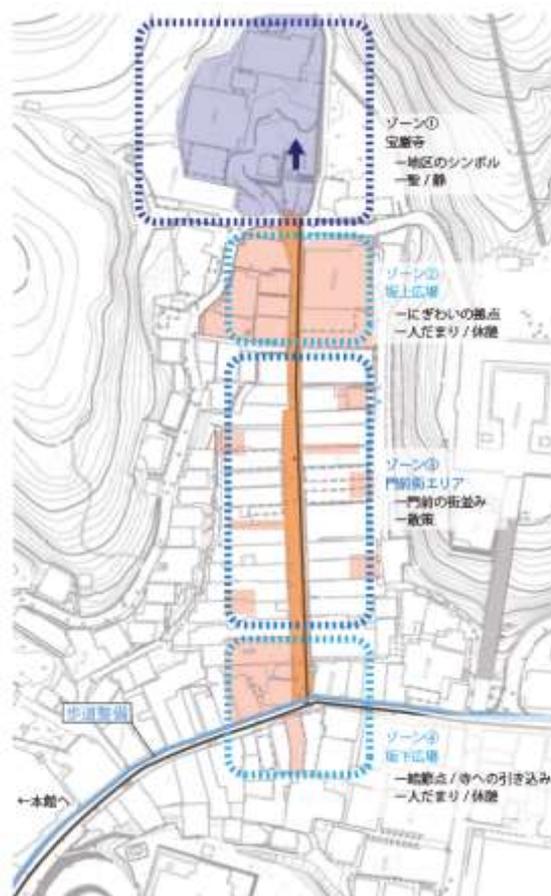


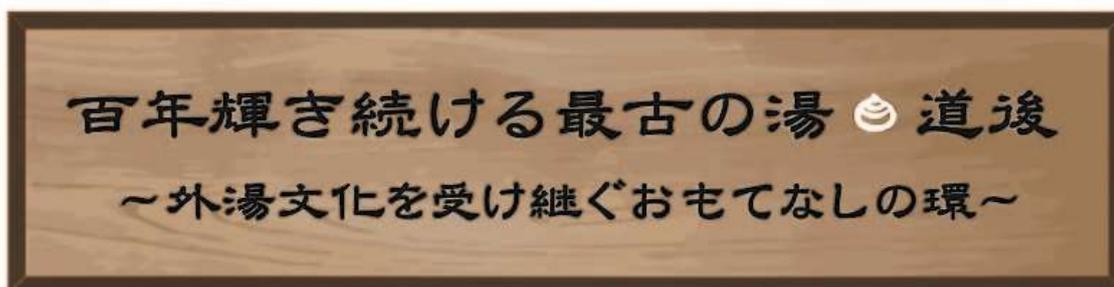
図 24 上人坂の計画ゾーニング



## 第4章 活性化基本方針

### 4.1 道後温泉地区の将来像

道後温泉地区の将来像として、以下のコンセプトを設定する。



道後温泉は、日本最古の温泉地として外湯文化を育み、数多く点在する名所・旧跡と合わせて、歴史的観光地区として発展してきた。しかし、モータリゼーションの進展とともに、かつて多くの旅人がそぞろ歩きをしてきた歩行・滞留空間はしだいに減少し、近年の観光形態の変化も相まって観光客は減少傾向にある。加えて、本市の繁栄の礎であり、市民共通の財産である道後温泉本館が、今後長期にわたり保存修復工事されることから、道後の集客力低下による観光客の更なる減少、さらには本市の地域経済に与える影響が懸念される。

このような課題に対し、工事期間中においても、国内外から訪れるあらゆる人を温かく迎え入れ、道後の歴史・文化が体感できる質の高い空間でおもてなし、総力をあげて魅力向上に努め続けることが必要である。

更に、工事完了後も見据え、幾多の苦難を克服して道後温泉本館を改築した先人の志や、多くの旅人を癒しもてなし、そぞろ歩きが楽しめる外湯文化など幾多の貴重な歴史・文化的資産を守り、磨き、生かしながら、次世代に誇れる道後を継承していく新たなまちづくりとして再スタートすることも重要である。

この考えのもと、道後が育んできたおもてなしの心で、様々な取り組みを環のように幾重にもつなぎ連動させながら、百年先においても、魅力的で生き活きと輝き続けるまちづくりを目指す。



白鷺伝説（神代）



玉の石伝説（古代）



聖徳太子来浴伝説（飛鳥時代）

4.2 将来像に導く5つの環（わ）

前章までの現況の課題や住民参加による計画策定プロセスを通じて得られた意見より、今後のまちづくりの課題を踏まえ将来像に導く視点は、「風景（街並み）」、「交通（回遊）」、「時間（歴史・くつろぎ）」、「にぎわい（消費）」、「つながり（連携）」の5つに整理される。

表 3 将来像に導くための視点

	現状の課題	住民参加プロセスを通じた意見	視点
街並み	<ul style="list-style-type: none"> <li>道後温泉地区にとって、街並みや風情は最大の魅力要素であるにも関わらず、道後温泉本館周辺の特定箇所のみを景観整備に留まっていることから、道後温泉地区全体として魅力的な空間が形成されていない。</li> <li>今後は、観光客の高齢化への対応や身障者等に配慮したバリアフリーなど、環境整備に留意しながら、魅力的な歩行空間の形成及び景観整備が必要である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>冠山からのビューポイント整備と緑化</li> <li>湯気による温泉の可視化、足湯整備</li> <li>地域の産品を生産する職人通りの形成</li> <li>道後山から夕焼けを望む視点場の整備</li> <li>上人坂空き地で市民農園の整備</li> <li>天空の湯 (冠山の足湯から道後温泉本館保存修復をみる)</li> <li>宝厳寺内に夕焼けを望む広場</li> <li>椿、桜、梅、桃などの植樹</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>日本最古の道後温泉らしい和の景観をつくる、温泉地の風情を残す</li> <li>電線や電柱の地中化</li> <li>道沿いに木や四季折々の花を植樹</li> <li>冠山を椿の咲く丘に回帰</li> <li>宝厳寺、上人坂を再生整備し回遊性を向上</li> <li>緑を利用、椿を活かす</li> <li>まちの動線を活かしたまちづくり</li> <li>夜景づくり</li> </ul>	風景 (街並み)
交通・回遊性	<ul style="list-style-type: none"> <li>観光客の多くが公共駐車場を利用しているが、駐車場へのアクセス道路は急勾配で、バリアフリー対応となっていない。また、祝谷東および臨時駐車場については、道後温泉本館・椿の湯へのアクセス距離が遠く利便性に欠け、歩道も無いため交通安全面で問題もみられることから、観光客の来訪満足度の低下を招いていることが推察される。そのため、道後温泉地区内の駐車場の適正配置を行うとともに、安全かつ快適な歩行者空間の確保が求められている。</li> <li>滞在時間の拡大とともに道後温泉地区の消費活動に結びつくことから、今後は既存の観光資源の魅力創出や魅力的な歩行環境の整備とともに、滞留できる空間や休憩施設の整備、更には多様な主体と連携しながら様々な魅力創出を図り、外国人観光客も含めて分かりやすい情報を発信することが重要である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>フリンジパーキングの整備(コミュニティサイクルとの連携)</li> <li>冠山駐車場の移動</li> <li>様々な要素をつなぐ環状道路の一方通行化</li> <li>回遊性を高める交通システムの整備(公共交通網、歩道、駐車場の一体的整備)</li> <li>市内の他の観光地を巡るバスの運行</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>足湯電車の運行</li> <li>外国人にわかりやすいガイドやサインの整備</li> <li>砥部行きシャトルバスの運行</li> <li>石手寺も含めた大きな回遊づくりと、上人坂のような小さな路地も含めた回遊づくり</li> <li>円のように一周できる歩行者ネットワーク化</li> </ul>	交通 (回遊)
地域資源	<ul style="list-style-type: none"> <li>道後温泉地区内には、多くの歴史的観光資源が存在するものの、それらが有する潜在的な魅力を十分に引き出すことが出来ていない。</li> <li>特に、上人坂周辺は一遍上人にまつわる歴史的背景を有する地域であることから、宝厳寺再建にあわせて、それらの潜在的な魅力を引き出す仕掛け・取り組みが必要となる。</li> <li>日本三大八幡造りの伊佐爾波神社、道後で最古の湯釜のある湯釜薬師、夏目漱石「坊っちゃん」で描かれた上人坂やかつての遊郭跡、更には北部の松山神社、常信寺、東部の石手寺など数多くの名所、旧跡が存在しているが、現状においては、多くの観光客は道後温泉本館のみの来訪が多く、回遊エリアは狭い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>改修期間の物語化と改修工事の可視化</li> <li>源泉をめぐるルートづくり</li> <li>冠山山頂寄席、冠山に展望露天風呂</li> <li>上人坂にゲストハウス等を計画し街区を形成</li> <li>にきたつの道の親水空間</li> <li>芝居小屋、道後の今昔を伝えるミュージアム</li> <li>宝厳寺再建による新観光スポット</li> <li>足湯付き勉強場所(寺子屋)</li> <li>劇を見ながら入れる温泉</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>道後のまちなめくりゲーム・スタンプラリー</li> <li>道後温泉本館保存修復工事見学のイベント化</li> <li>夏目漱石の顕彰施設整備</li> <li>伊予餅、砥部焼、菊間瓦などの伝統工芸の紹介</li> <li>長期滞在体験型ツアーの実施(ウォーキング、サイクリング等)</li> <li>ガイドと行く道後健康ウォーキング</li> <li>温泉治療やスポーツリハビリできる施設整備</li> <li>湯治文化の再興</li> <li>広場空間の整備</li> </ul>	時間 (歴史・くつろぎ)
観光・経済	<p>(道後温泉本館の保存修復工事による経済損失)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>観光資源として道後温泉本館の魅力に依存している当温泉地において、今後の本館保存修復工事は、観光客減少に伴う旅館ホテルの減少や規模縮小等をはじめとして、大きな経済的ダメージを被ることが危惧されることから、代替施設となる椿の湯の新設、改修をはじめとした周辺施設の魅力の向上が求められている。</li> </ul> <p>(消費誘発イベント等の必要性)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>商店街等での消費を誘発するイベントが少なく、周辺の観光施設が潜在的に有する魅力を十分に発信できていないとは言えない。道後温泉本館の保存修復工事期間を見据え、より多様な客層に対して積極的な情報発信が求められている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>足湯と特産市を併設した市場(もくもく市)の開催</li> <li>道後温泉本館保存修復デジタル博物館の整備</li> <li>地元住民も集まれる晩酌通りの形成</li> <li>ゆっくり寛げるオープンカフェ・オープンテラス</li> <li>Wi-Fi整備による道後情報の発信</li> <li>椿石鹸、タオル、温泉まんじゅうなど温泉関連商品の開発</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>工事の様子を定期的にネットで配信</li> <li>ポイントカードや年間パスの開発、旅館・ホテル全体で使える入浴券を発行</li> <li>道後マルシェ、道後楽市楽座の実施</li> <li>道後をアートの街に</li> </ul>	にぎわい (消費)
地域連携	<ul style="list-style-type: none"> <li>木造住宅・店舗等が密集する地域が存在するとともに、緊急車両の通行できない区間もあるため、災害や火災への対応を想定した道路幅員の確保が必要となる。</li> <li>今後は、災害に強いまちづくりを推進するため、地域、大学、行政等が有機的に連携することが必要となる。</li> <li>加えて、このような地域課題の解決を目的とした連携を軸に、今後の更なる地域活性化を意図したワークショップ、イベントの開催等の連携策の検討も併せて行うことが求められている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>地元住民によるまちづくり団の結成</li> <li>路(みち)の駅の整備(生活・観光の交流拠点)</li> <li>地元大学との連携イベントの展開</li> <li>奥道後とのコラボ(湯の活用)</li> <li>地域のコミュニティFMスタジオ</li> <li>自立した地域づくり・地域経営・資金づくり</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>道後温泉本館チャリティ募金や銘板の募集</li> <li>他市町との広域連携</li> <li>学生、シニアのまち歩きガイドの育成、教育</li> <li>大街道、銀天街などの商店街との連携</li> <li>安全安心の視点</li> </ul>	つながり (連携)

道後温泉地区は、道後温泉本館・冠山を中心として、旅館・ホテル街、上人坂、伊佐爾波神社、道後公園、商店街、椿の湯、松山神社、石手寺といった様々な個性豊かなエリアが「環状」に結びついている。そこで、この5つの視点をベースに基本方針・対策内容を導き出すとともに、これからが複合的に結びつき、5つの「環(わ)4」になることで、道後温泉地区の各エリアの個性を活かしたまちづくりを育みながら、各々のエリアが連携・連動し、道後温泉地区全体が活性化することを目標とする。

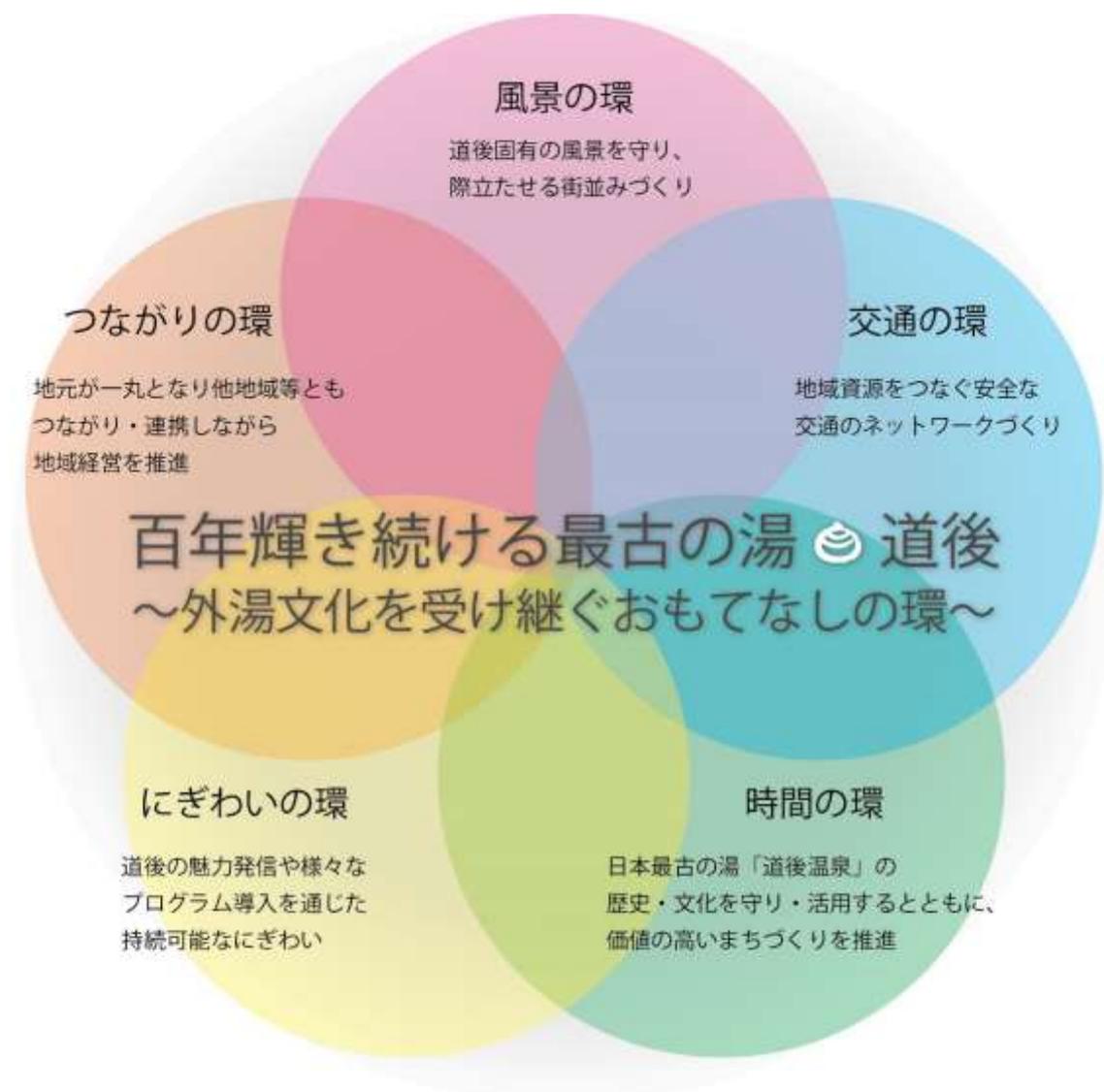


図 25 5つの環(わ)の関係性

4 「環(わ)」とは、広辞苑によると、「輪の形をなすもの。まわりをめぐること。とりまくこと。」となっており、「輪」が「車輪」のように比較的小さいスケールで使われるのに対して、「環」は「土星の環」のように大きいスケールで用いられる。まちづくりでは、空間・時間・主体など多様な軸をダイナミックかつ有機的につなぎあわせることが肝要であることから、本計画では「環(わ)」を道後温泉地区の将来像に導くための中心を成すものと考えた。

## 4.3 道後温泉活性化の基本方針

提唱する5つの環（わ）を基に、7つの対策方針を設定する。

表4 対策方針

	5つの環	対策方針
基本方針	I.風景の環	<p><b>①道後固有の風景や街並みを活かしたおもてなしの場づくり</b> 道後地区の地形・眺望を活かした空間整備や、道後固有の風景を守り際立たせていく街並みづくりを目指す。 建築物は、耐震改修やリノベーションにあわせファサードに配慮することで、災害時のリスク回避と景観整備を同時に実現する。</p>
	II.交通の環	<p><b>②安全快適な歩行空間の実現</b> 地域資源をつなぐ安全な交通のネットワークづくりを実現するために、駐車場や駐輪場を整備し、道後温泉地区に流入する車両交通を抑え、住民や観光客が安心して生活し散歩できるための都市基盤を整備する。加えて、路地や広場の整備により道後温泉地区の回遊性を向上させ、滞留できる空間を実現する。</p>
	III.時間の環	<p><b>③まちなか滞在スポットづくり</b> 日本最古の湯「道後温泉」が培ってきた歴史的な空間を観光資源や地域コミュニティの資産として大切に守り・活用しながら、道後温泉の歴史・文化が体感できるまちづくりに取り組み、質の高い時間消費を実現する。</p>
	IV.にぎわいの環	<p><b>④道後ブランドの新たな魅力発信</b> 新規顧客とリピーターに向けた情報発信や様々なプログラムを導入し続け、地域の活性化が持続的・発展的に展開されることを目指す。</p>
		<p><b>⑤多様な客層の誘客</b> インバウンドなど多様化する観光ニーズを的確に捉えながら、道後温泉地区の各エリアに新しい人の流れをつくり、消費を生むことで、地域全体に経済が流れ活性化していく仕組みをサポートする。</p>
V.つながりの環	<p><b>⑥地元による地域経営</b> 地域主体でまちづくりに参加できる仕組みづくりについてサポートする。補助金のみ依存しない財源づくりを検討し、持続的かつ先進的な地域経営を目指す。 地域が互いに連携しながら災害に強いまちづくりの実現を目指す。</p> <p><b>⑦地域を越えた連携による誘客</b> 地域住民だけでなく地元学生や観光客まで巻き込み、市内外及び県内外の他地域と連携しながら誘客促進を目指す。</p>	

## 第5章 活性化計画

### 5.1 全体計画

道後温泉活性化の基本方針を踏まえ、事業効果を高めていくために、魅力的な観光資源を有する3つのエリアを重点整備エリアとする。また、来街者のアクセス性の向上を図る交通結節点の改善、並びに民間開発事業の景観づくりを誘導する。

4章で整理した対策方針を基に、その対策内容及び対策エリアを表5、図26に示す。

表5 全体計画

まちづくり コンセプト	対策方針	対策内容	エリア別対策内容				
			榑の湯周辺 エリア	上人坂周辺 エリア	本館・冠山周辺 エリア	その他	
I.風景の環	① 道後固有の風景や 街並みを活かした おもてなしの場づくり	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 道路及び沿道景観整備</li> <li>● 手湯・足湯の整備</li> <li>● 宿泊施設耐震改修に伴う景観整備</li> <li>● 身近な景観づくり等による観光客へのおもてなし</li> </ul>	道路および沿道景観整備		足湯の整備	足湯の整備	宿泊施設耐震改修に伴う景観整備
			身近な景観づくり等による観光客へのおもてなし				
II.交通の環	② 安全快適な 歩行環境の実現	<ul style="list-style-type: none"> <li>● フリンジパーキング・駐輪場の整備</li> <li>● 安全快適な歩行空間と賑わいの創出に資する自動車流入抑制</li> <li>● 回遊性を高める交通システムの検討</li> <li>● 案内表示等の充実</li> </ul>	フリンジパーキング・駐輪場の整備				
			安全快適な歩行環境と賑わいの創出に資する自動車流入抑制				
			回遊性を高める交通システムの検討 案内表示等の充実				
III.時間の環	③ まちなか滞在 スポットづくり	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 空き家・空きスペースの有効活用</li> <li>● 多様なニーズに対応した宿泊施設整備</li> <li>● 道後の歴史・文化を体感できる施設整備とサービス提供</li> <li>● 休憩施設の設置</li> </ul>	空き家・空きスペースの有効活用	多様なニーズに対応した宿泊施設整備			多様なニーズに対応した宿泊施設整備
			道後の歴史・文化を体感できる施設整備とサービス提供 休憩施設の設置				
IV.にぎわいの環	④ 道後ブランドの 新たな魅力発信	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 道後の魅力情報の発信強化</li> <li>● 道後オリジナルサービス・商品の開発</li> <li>● 夜の湯のまちの魅力創出</li> <li>● 夜のそぞろ歩きの演出</li> </ul>	道後の魅力情報の発信強化 道後オリジナルサービス・商品の開発 夜の湯のまちの魅力創出 夜のそぞろ歩きの演出				
	⑤ 多様な客層の誘客	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 外国人観光客の受け入れ環境整備</li> <li>● 体験・滞在プログラムの開発</li> <li>● 教育旅行向けのプログラム開発</li> <li>● イベント 拡充と新たなプログラムの開発</li> </ul>	外国人観光客の受け入れ環境整備 体験・滞在プログラムの開発 教育旅行向けのプログラム開発 イベント拡充と新たなプログラムの開発				
V.つながりの環	⑥ 地元による地域経営	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 市民や学生参加による温泉まちづくり</li> <li>● おもてなし人材育成</li> <li>● 安全安心なまちづくり</li> <li>● 財源づくり</li> </ul>	安全安心なまちづくり 財源づくり おもてなし人材育成 市民や学生参加による温泉まちづくり				
	⑦ 地域を越えた 連携による誘客	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 広域連携による誘客促進</li> <li>● 異分野・異業種連携の推進</li> <li>● 二地域居住の推進</li> </ul>	広域連携による誘客促進 異分野・異業種連携の推進 二地域居住の推進				

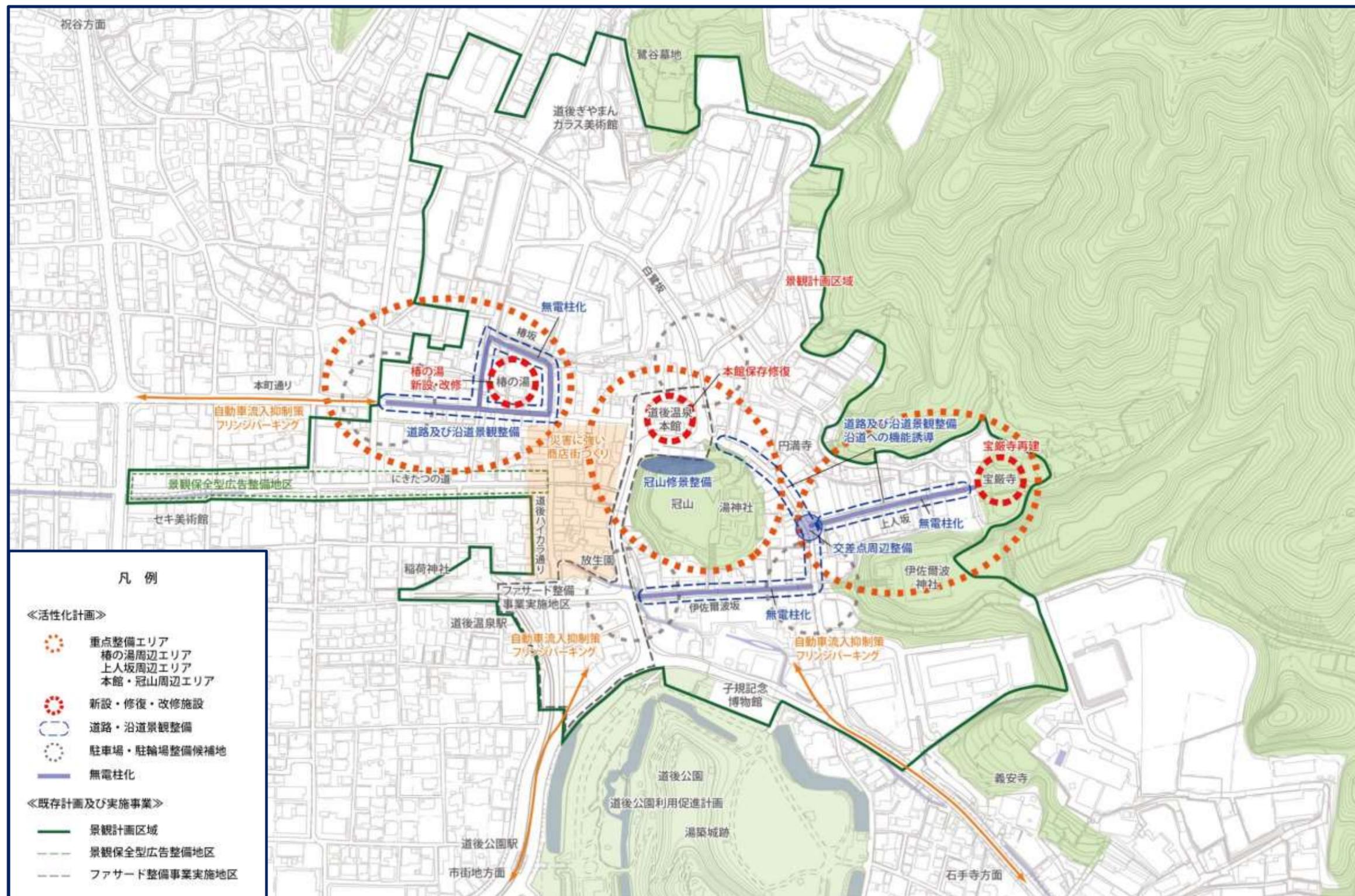


図 26 活性化計画 全体図

表 6 事業スケジュール

	項目（事業）		整備主体	H26 検討	短期			中期			長期					備考		
					H27 (2015)	H28 (2016)	H29 (2017) ◆えひめ国体 (9~10月)	H30 (2018)	H31 (2019)	H32 (2020) ◆東京リッパ (7~8月)	H33 (2021)	H34 (2022)	H35 (2023)	H36 (2024) ◆本館 130周年	H37以降 (2025以降)			
榎の湯周辺 エリア	榎の湯 新設・改修	新館建設	公共	→	→	→												
		既存館の改修	公共	→	→	→												
	道路及び 沿道景観整備	榎の湯 外周部 東西南	道路整備・高質舗装	公共	→	→	→										手湯・足湯整備含む	
			無電柱化	公共	→	→	→											
			ファサード整備 屋外広告改修・撤去等	民間	→	→	→											
		消防署 前面	道路整備・高質舗装	公共							→	→	→					
			無電柱化	公共							→	→	→					
			ファサード整備 屋外広告改修・撤去等	民間	→	→	→											
災害に強い商店街づくり	民間	→	→	→														
上人坂周辺 エリア	宝蔵寺再建		民間	→	→													
	沿道機能誘導／民間開発		民間	→	→	→										多様なニーズに対応した 宿泊施設整備含む		
	道路及び 沿道景観整備	上人坂	道路整備・高質舗装	公共	→	→	→											
			無電柱化	公共	→	→	→											
		伊佐爾 波坂	道路整備・高質舗装	公共							→	→	→					
無電柱化			公共							→	→	→						
本館・冠山 周辺エリア	道後温泉本館修復		公共	→	→	→												
	冠山（足湯・階段整備）		公共	→	→	→												
その他	宿泊施設等耐震改修に伴う景観整備		民間	→	→	→										多様なニーズに対応した 宿泊施設整備含む		
	アソビハ〜キョウ	榎の湯周辺（駐輪場含）	民間	→	→	→				→	→							
		上人坂周辺（駐輪場含）	民間	→	→	→												
		その他	民間	→	→	→				→	→							
その他、各種ソフト施策		公共・ 民間	→	→	→											施策展開		

(凡例)

検討 →

設計 →

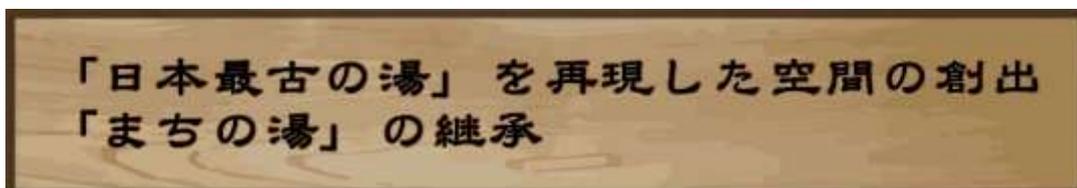
工事 →

(状況により延長) →

## 5.2 重点整備エリア

### (1) 椿の湯周辺エリア

#### ① コンセプト



#### □ 「日本最古の湯」を再現した空間の創出

日本最古の湯は、森の中に湧いた湯を囲む大らかな空間であった。これをイメージして以下2つの考えで再現する。

- ・ 飛鳥時代に、聖徳太子が来浴された際に詠った寿国を感じる空間を創出するため、建物の周囲を緑で取り囲み、「椿の森」の中に湧く温泉として仕立てる。
- ・ 中庭に面した憩い・佇みの場として、縁側・広場・街路がひとつなぎとなった大らかな半屋外空間を創出する。

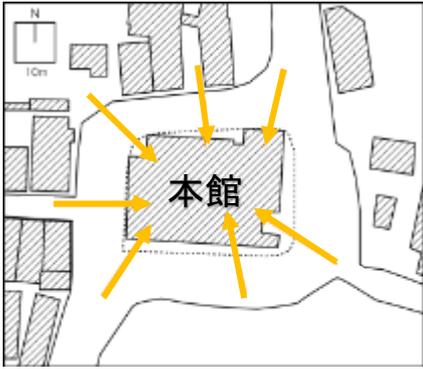
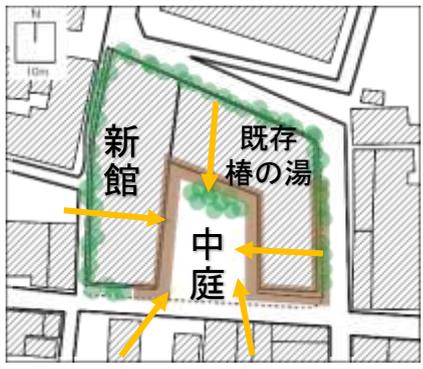


聖徳太子来浴伝説(飛鳥時代)

#### □ 「まちの湯」の継承

女性、高齢者、身障者、外国人に優しい舗装材の使用、座り空間とサインを配置する。観光客のスペースと仕分けされた、地域住民が休めるエントランス空間を整備する。

表 7 道後温泉本館と椿の湯の比較

道後温泉本館	椿の湯
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 建物が主役、それを広場が囲む                             <ul style="list-style-type: none"> <li>➢ 明治時代の風格ある屋根</li> <li>➢ 日本唯一の皇室専用浴室（又新殿）</li> <li>➢ 刻を告げる振鷺閣</li> <li>➢ 壮麗な建物</li> </ul> </li> </ul> 	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 広場が主役、それを建物が囲む                             <ul style="list-style-type: none"> <li>➢ 歴史を伝える椿の森と湯の川</li> <li>➢ 道後行幸の伝承、女帝の湯</li> <li>➢ 回廊</li> </ul> </li> </ul> 

② エリアの位置づけ

椿の湯は商店街の北西側に位置している。南側からは、商店街からの観光客のアクセス、北側からは、宿泊施設からの宿泊者のアクセス、西側からは、自動車・自転車によるアクセスが見込まれる。これら複数の動線を受け止める機能がこの周辺には求められる。

椿の湯の改築に伴って、本館修復時における温泉観光の中心拠点となり、本館修復後は本館に次ぐ観光拠点と位置づけられる。また、周辺整備によって、飲食スペースなど賑わいの拠点となる。

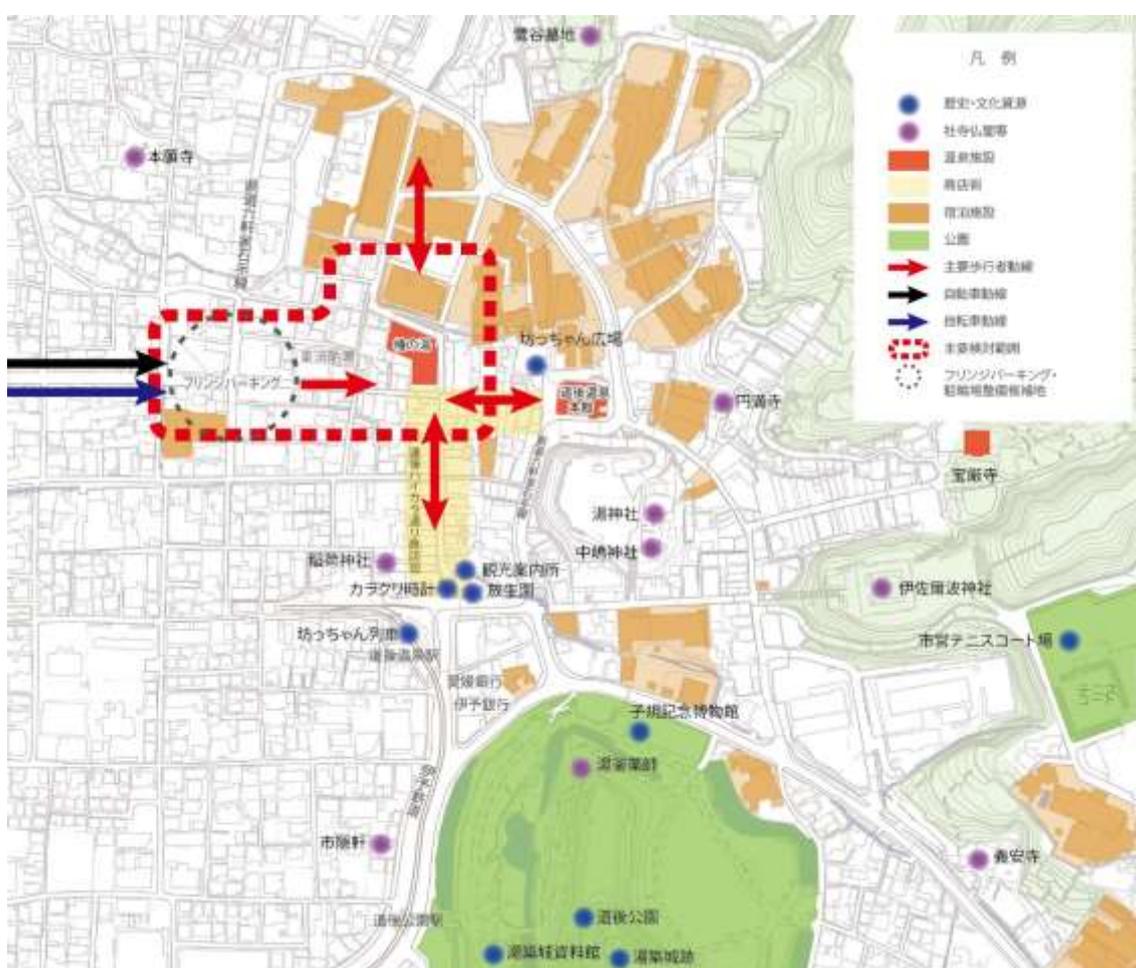


図 27 エリアの位置づけ

### ③ 基本計画

#### 1) 整備方針

##### □ 中央広場を介した観光客・住民の動線の整序化

西側には、斉明天皇の行幸の歴史を活かした、飛鳥時代を感じる新たな温泉施設を整備し、東側の既存の椿の湯との間に象徴的な広場を設ける。住民は南方面からのアクセスを想定し、観光客は主に商店街からアクセスすると考え、広場側にエントランスを設けることで、中庭を介して歩行者動線が交わるようにする。

##### □ 住民の街の湯のためのエントランス整備

既存の椿の湯のエントランスは植栽を設けて商店街からの視線をうまく遮る作りとし、大きなベンチを置くことで住民の憩いのスペースとする。身障者向け駐車場と電動カート置き場をエントランス付近に設け、アクセス性を確保する。

##### □ 歩行者の視線を引きつける景観を整備

街路と街路の結節部には、舗装の変化や湯の活用・植栽を用いて、場所ごとに視線を引きつける景観を整備する。

##### □ 自動車・自転車交通について

椿の湯西側付近に駐車場の整備を想定し、自動車の流入を極力軽減する。ただし、既存の椿の湯付近に身障者向け駐車場を設け、高齢者・身障者に必要なアクセス性を確保する。

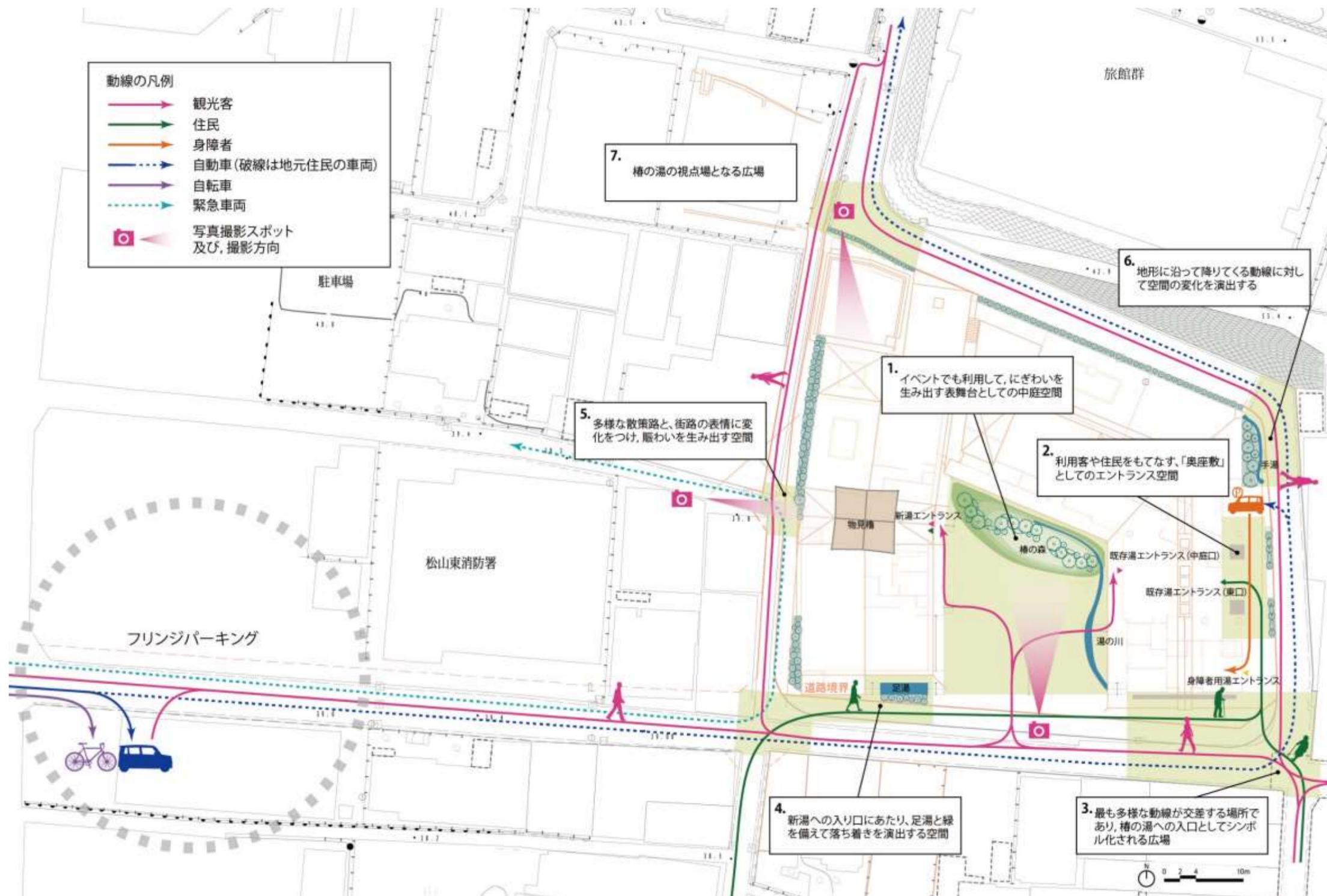
自転車交通については、自動車駐車場とあわせて自転車駐輪場の整備を想定し、ここから徒歩でアクセスさせる。

##### □ 緊急車両について

新館西側の路地は、道路区域と敷地区域をあわせて4mの幅員を確保することで、緊急車両の通行が可能となるようにする。

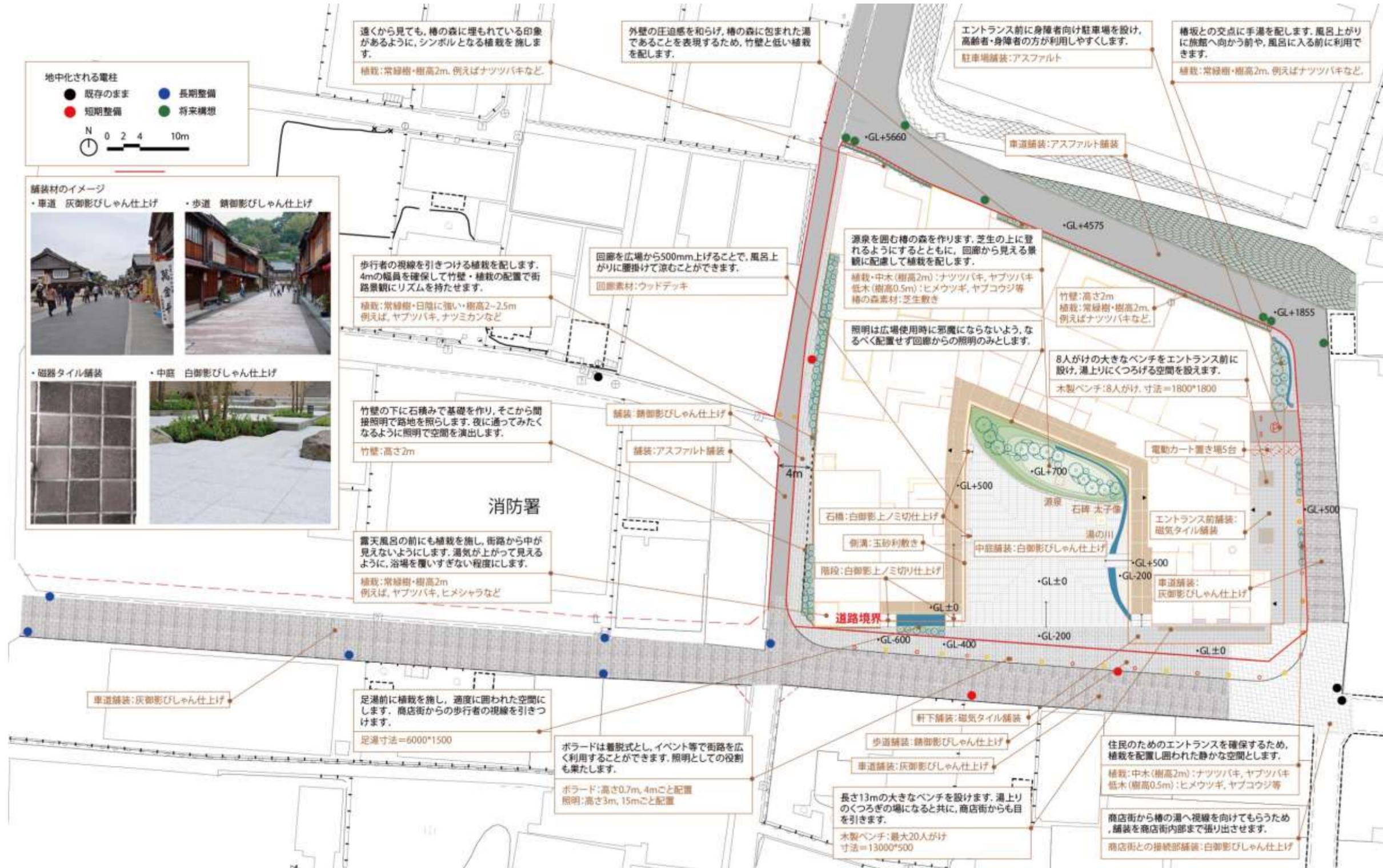
2) 動線計画

椿の湯西側からの動線については、県道六軒家石手線からの歩行空間を確保するとともに、椿の湯北側、商店街側からの動線についても地形に沿って空間を変化させる等の演出を行う。



3) 整備イメージ

椿の湯は、中庭でのイベントや人の交流の場を創出し、周辺道路では無電柱化や高質舗装、植栽、ポラードなどを整備し、質の高い最古の湯を感じられるおらかな空間の創出を目指す。



4) ファサード案

椿の湯南側の商店は、「和×モダン」をコンセプトに、近代的な和風建築のファサードを整備する。色調を抑え、木質化を進めることで、低コストで和風の佇まいの建築にすることができる。

■考え方



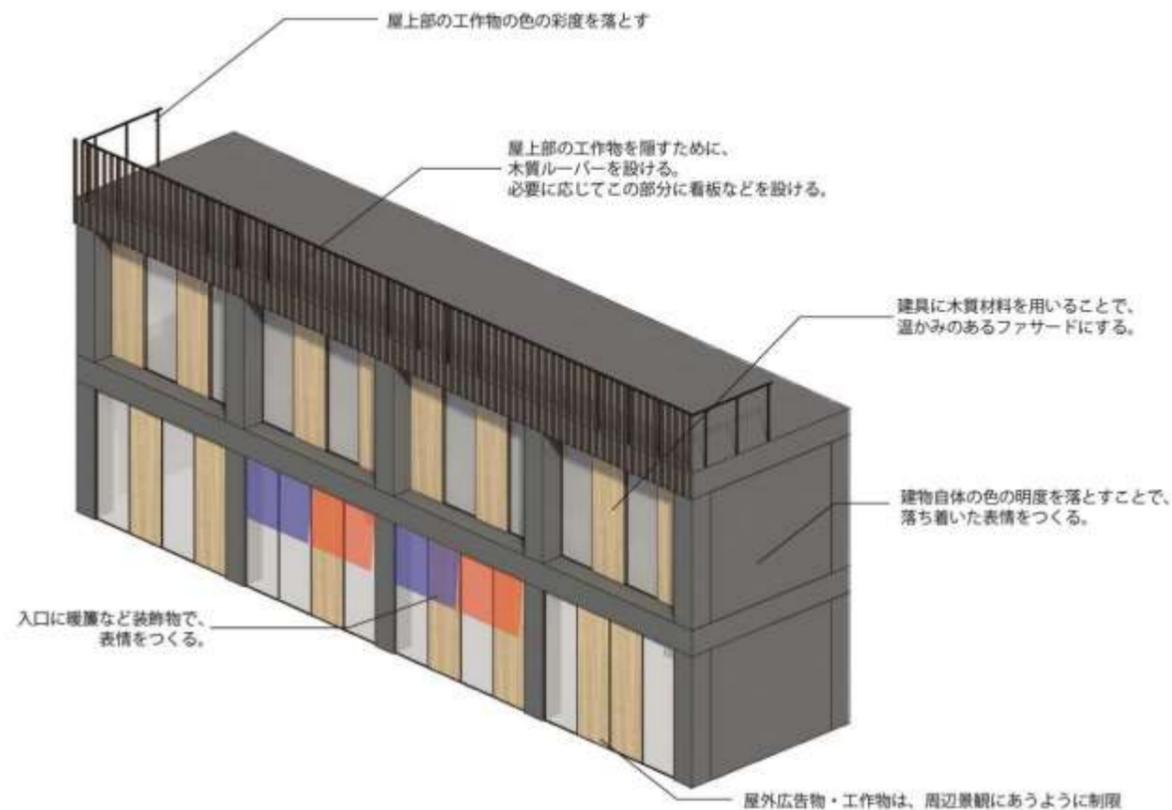
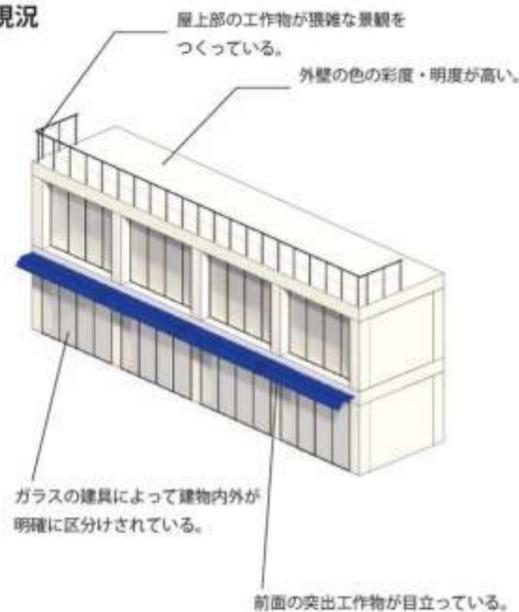
現況椿の湯南側の沿道建物は、現代的なコンクリート造・陸屋根などの建物が多く、温泉街に特有な和風の要素が不足している。

椿の湯改築に併せて、沿道建物の景観をより魅力的にしていくためにも、既存のモダンな要素を活かしながら、和風の要素を取り込んでいくことで、軽微な変更で抑えることが可能である。



■ファサード整備方針案

現況



■「和 x モダン」参考事例

とらや一条店



開放感のあるガラスや落ち着いた着せを与える木質材を用いた外観



明度・彩度を抑えた色調

伊丹十三記念館



明度・彩度を抑え、シンプルな外観



スチールなどモダンな要素は彩度の低い色調とし、木質材や石、植栽等自然材料で温かみのある和風を演出している。

5) 無電柱化の検討

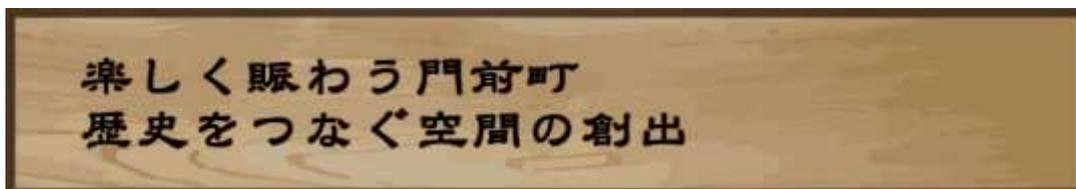
椿の湯（既設・新設）外周道路及び本町通りの県道～椿の湯間において無電柱化を目指す。このうち、椿の湯南側区間においては、早期整備を図り、その他区間は既設の椿の湯の建替え時や本館修復時期、プリンジパーキングの整備等を踏まえて長期的視点から整備を検討する。



手法		整備主体	施設の位置づけ	費用負担
①電線共同溝方式		道路管理者等	道路付属物	・電線共同溝本体：道路管理者負担 ※電線事業者から負担金を徴収 ・トランス・電線等は電線事業者が負担
電線共同溝方式以外	②自治体管路方式	地方公共団体	道路占用物件	・地中化本体：道路管理者負担 ※電線事業者からの負担金の徴収無 ・トランス・電線等は電線事業者が負担
	③単独地中化方式	電線管理者	道路占用物件	・全額電線管理者が負担
	④要請者負担方式	要請者	道路占用物件	・全額要請者が負担

## (2) 上人坂周辺エリア

## ① コンセプト



## □ 楽しく賑わう門前町

これまでの道後に不足していた施設や広場、多様な回遊動線を創出することを目指す。特に、坂道空間を一本の道路空間としてデザインするのではなく、上人坂の歴史や文化を反映してきた南北に存在する2本の路地に対して、開発街区を通過する短冊状の街路を結びつけることで、ループ状の動線が何種類も生まれるようにデザインする。

## □ 歴史をつなぐ空間の創出

上人坂には、旅館街や花街としての歴史、一遍上人の誕生の地といわれる宝厳寺など、多様な文化が積層している。それらを統一的な思想でデザインするよりは、一本のみちのなかでも多様な性格を残すようなゾーニングを行う。坂下は賑わい、坂上は歴史を感じられる空間として位置づけ、その間のゾーンにも徐々に異なる性格を持たせることで、訪れる人にとって飽きさせないみちづくりを目指す。

② エリアの位置づけ

宝厳寺の再建によって、周辺の伊佐爾波神社など寺社仏閣の集まる地区として、今後、道後温泉地区の重要な新規観光拠点(回遊拠点)の一つとして位置づけられる。

上人坂は、本館・冠山東側に位置し、石手寺方面からのアクセスを受け止め、本館からの歩行者回遊が見込まれる地区となる。周辺には、伊佐爾波神社や円満寺など、寺社仏閣が集まっており、参詣者の回遊するエリアとしての特性を持つ。また、地形的には、宝厳寺などは山裾に位置しており、眺望のよい立地をしている。

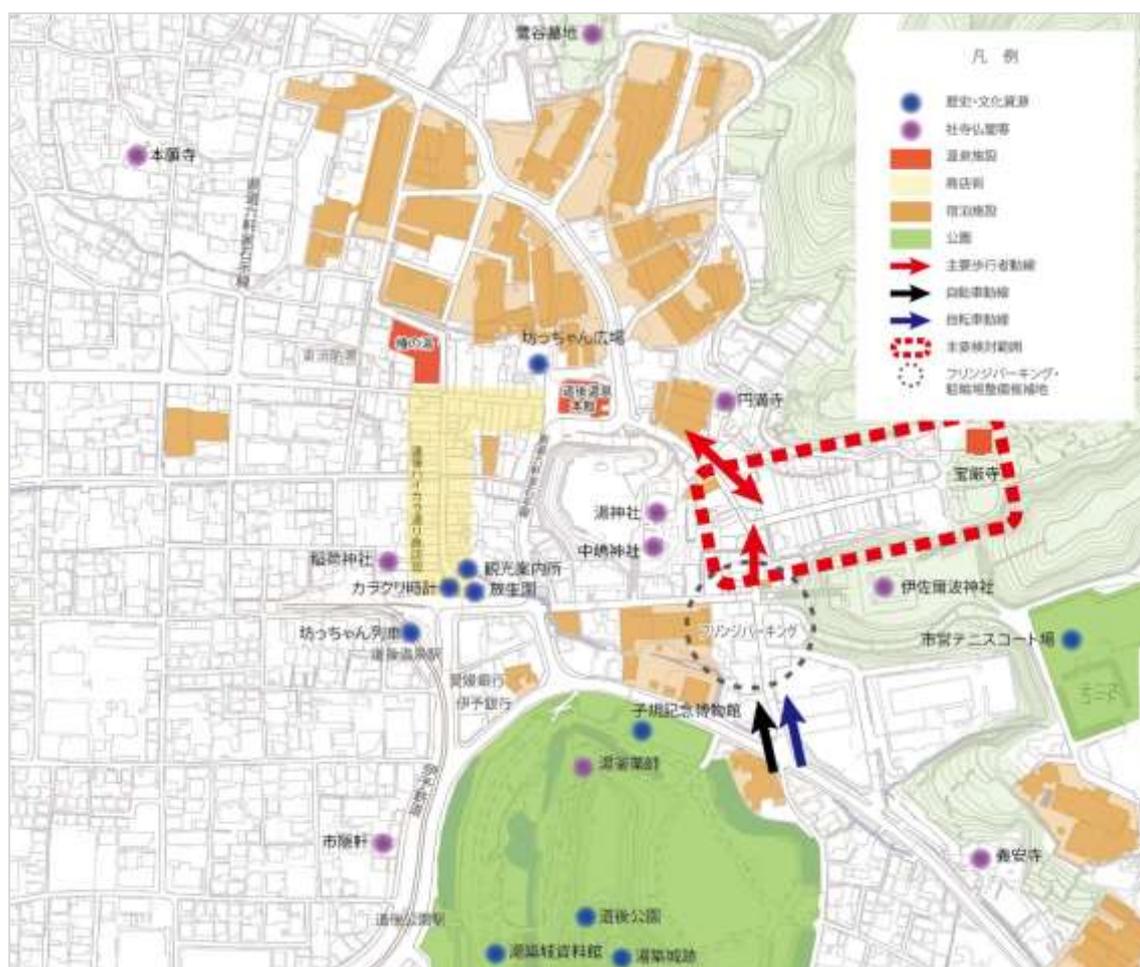


図 28 エリアの位置づけ

一方で、以下の点において課題を有している。

□ 多数の空地・駐車場の存在

現状の上人坂には、多くの空き地や駐車場が存在しており、宝厳寺に向かう参道として魅力ある十分な景観とは言い難い。

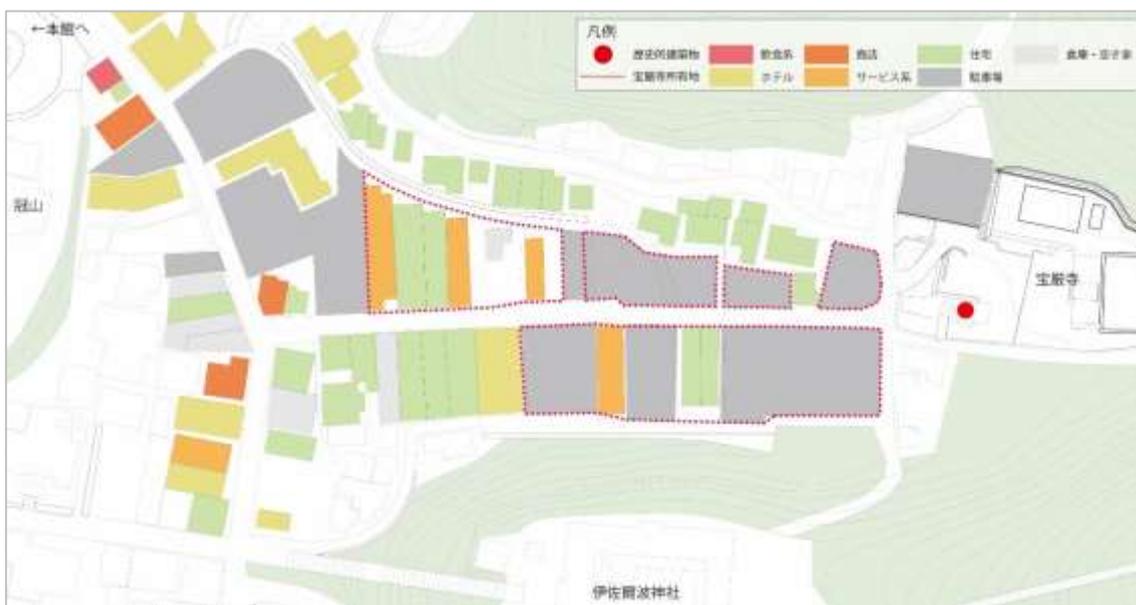


図 29 上人坂沿道の土地利用状況

□ 機能的なゾーニングの必要性

新たな需要として沿道の一部に住宅が既に建ち始めており、地区全体での統一した景観や土地利用を誘導していくためにも、地区内におけるゾーニングを明確にする必要がある。

### ③ 基本計画

#### 1) 整備方針

初音町・伊佐爾波神社周辺から上人坂に至るまでの対象地における、現況の交通安全性や多くの空地や景観的魅力の不足などの課題に対して、災害時対応のための緊急車両等通行の安全性確保や、新規観光拠点として道後温泉地区全体の回遊を促進する魅力ある景観の形成を目的として、道路・沿道景観や民間開発を誘導する整備を行う。

#### □ 道路景観・沿道景観整備

宝厳寺再建に併せた動線上の良好な道路景観・沿道景観形成

#### □ 外湯文化の実現のための回遊促進

誘客機能の配置、歩行者の視線を引きつける景観整備、歩道整備、車両流入制限（駐車場の確保など）

#### 2) ゾーニングの方針

#### □ 道後地区における上人坂の機能的位置づけの確認

上人坂に導入すべき機能を考えるためにも、道後温泉地区全体でのゾーニングを踏まえた上で、他地域と競合しないように、導入すべき機能を検討する必要がある。また、道後温泉地区全体の回遊を促進していくためには、周辺部との開発の度合いを考慮しながら、導入機能を考えていく必要がある。

#### □ 具体的な導入機能の検討

道後の商店街などでは、土産物屋や物販店が多く、十分な飲食スペースを伴った飲食店が少ない印象がある。また、現況の上人坂には、ホテルやマッサージなど宿泊・サービス業があり、これらを活かすことも考えられる。周辺の歴史文化施設との連携に配慮した文化機能の導入も考えられる。以上のことから、文化施設、宿泊施設とそれに付随する飲食店などの機能の導入が考えられ、これらの機能を坂下の賑わい空間から坂上の歴史を感じられる空間までの間のゾーンを意識してリズムよく配置する必要がある。

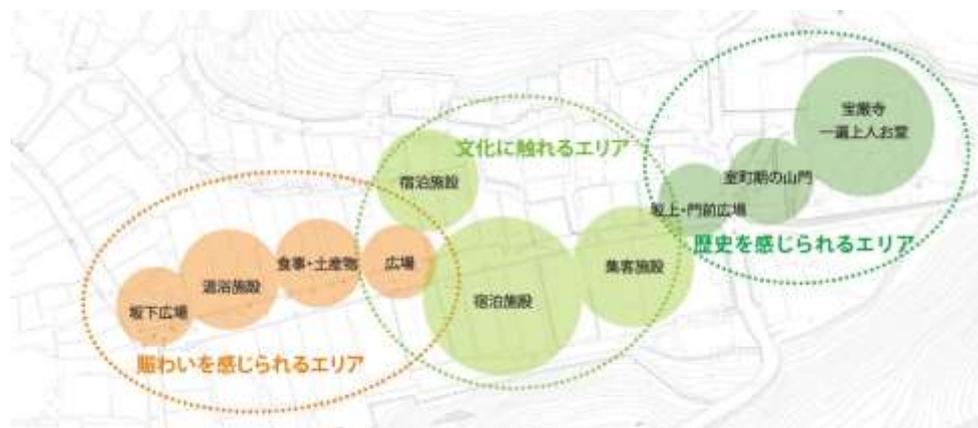
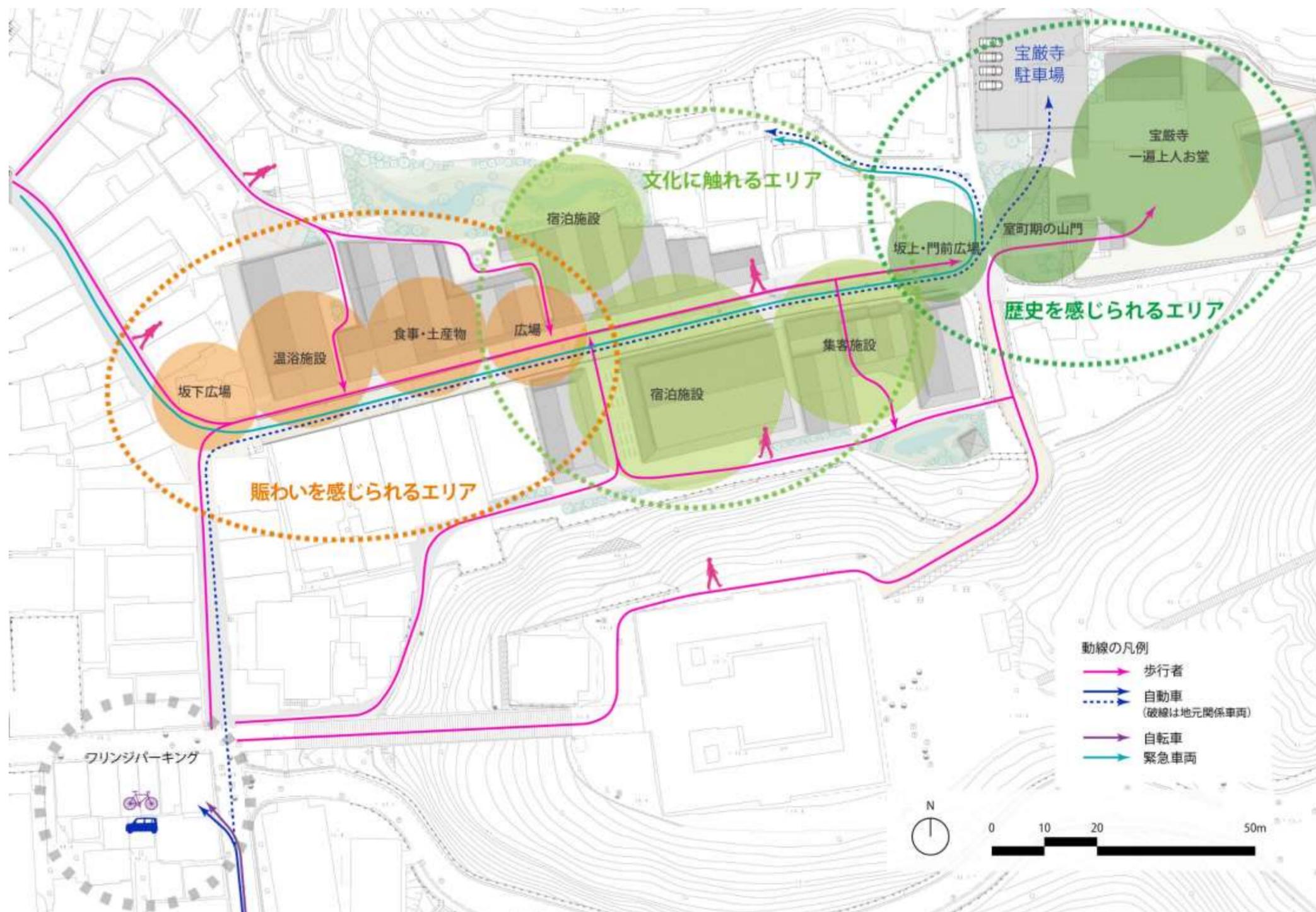


図 30 ゾーニングの方針

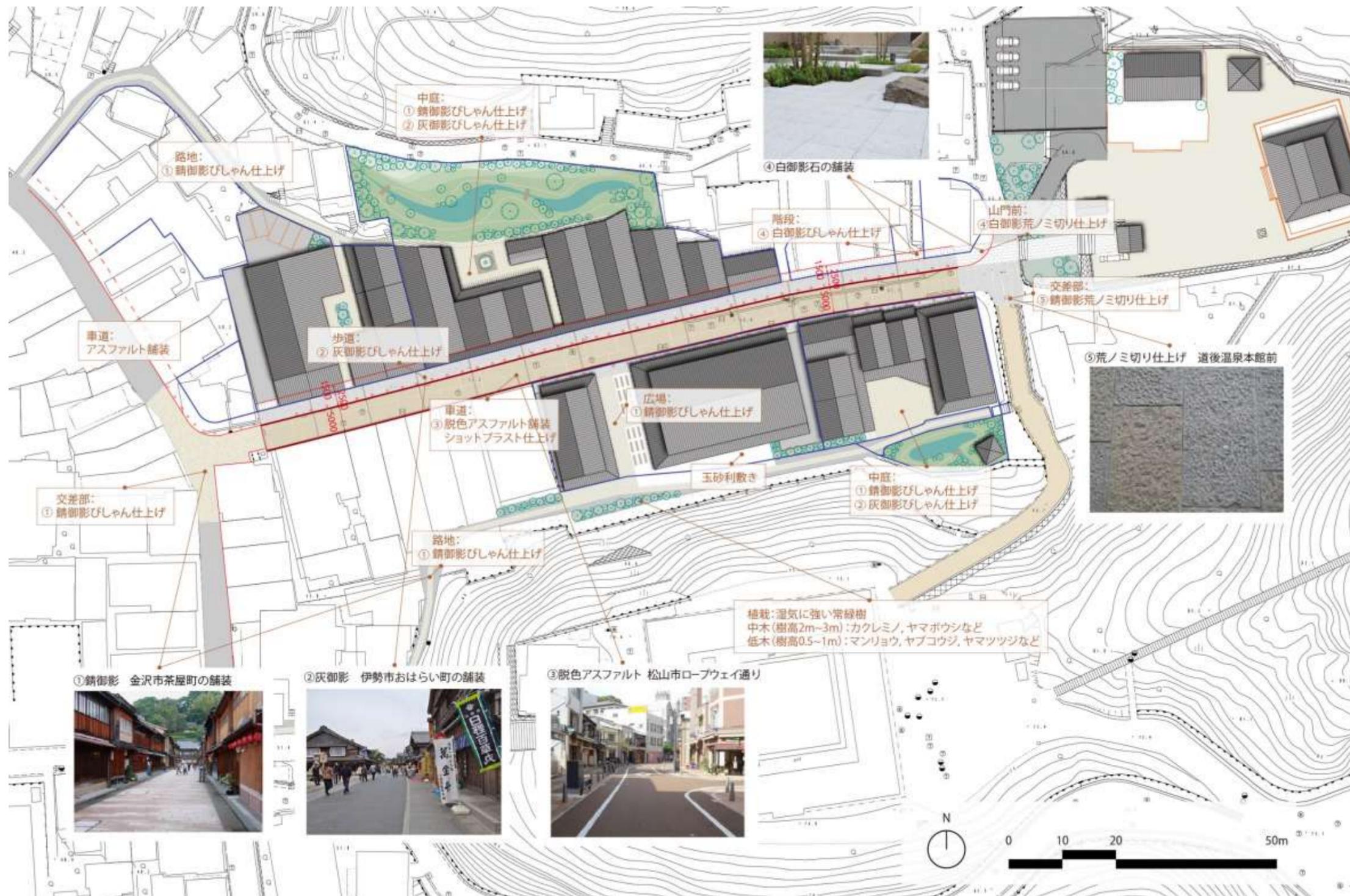
3) 動線計画

宝厳寺に至る動線計画としては、上人坂をメインに交通的な利便性を踏まえつつ、景観に配慮した整備を進め、上人坂と両脇の裏道についても歩行者散策エリアとして可能性を検討する。駐車場については、歩行者の回遊を促進するためにも、周辺部への駐車場の確保を検討し、そこから宝厳寺まで歩かせるようにする。また、緊急車両については、災害時の車両の進入のしやすさに配慮して、入口の交差点部分では、広場整備と合わせて上人坂の道路幅を拡張することで、緊急時の上人坂への車の出入りをスムーズにすることなどを検討する。



4) 整備イメージ

建物間を可能な限り詰めることでリズム感のある街並みを形成する。また、各街区に中庭を持った通路空間を作ることで、小さな滞留空間を創出すると同時に、上人坂と南北の路地を結ぶ街路として機能させ、多様な回遊動線を創出することを目指す。



5) ファサード案

上人坂には今も歴史を感じさせる建造物が坂下に残っている。松ヶ枝町時代には木質バルコニーが張り出した2層の建物群が連なって上人坂の景観をつくっていたことがわかる。そこで、この景観を参考にしながら、温泉街における表参道として相応しい景観形成を目指す。

昭和34年5月



似たデザインのサイン

木質建具

木質バルコニー

現況



木質バルコニー

木質建具

○参道全体の参考イメージ

川越(埼玉県)



川越では、蔵造りの街並み景観を維持再生していくことをめざし、「まちづくり規範」を作成するなどして、個別の建物を強調的なデザインとすることで、統一ある通りの景観をつくっている。

特徴的なデザインとしては、「瓦屋根」、「黒塗りの外壁」、「入口の庇」、「無電柱化」、「街燈」、「木質材料の利用」が挙げられる。

二寧坂(京都府)



京都の清水寺に至る参道である二寧坂では、地区で自主規制を明文化する「まちづくり自主規制宣言」をつくるなどして、地区の景観を生かした維持更新をしていく取り組みを行っている。

特徴的な景観として、「屋根の連続する風景」、「格子、板葺などの緻密な細部デザイン」、「ベンチ・サイン・傘などによる生活空間の滲み出し」、「温かみのある街燈」などを挙げて、地区の景観を分析し、景観づくりに活かしている。

○ファサード参考イメージ

上人坂の歴史的景観に配慮し、2階に張り出したバルコニーを設け、瓦屋根、木質材料などを多様に使い、賑わいを演出する植栽・ベンチ・照明・看板などで店先の表情をつくる。

屋根・庇



瓦屋根・銅板葺の屋根などで、和風の表情を遠景に対しても演出する  
(道後温泉本館)



看板



木質材料・和風のフォントで統一されたデザインの突出し看板  
(京都 三寧坂)

ベンチ・植栽



店先の木質ベンチや植え込み  
(軽井沢 ハルニレテラス)

照明・バルコニー



吊り照明とデザインの凝ったバルコニーで、連続する景観をつくる  
(箱山温泉)

外壁・窓



木質建具・ガラスショーウィンドウで、賑わいをつくる  
(佐賀県 有田町)

案内サイン



場所の由来が一目でわかる案内サイン  
(新潟の町 小路めぐりサイン)

6) 無電柱化の検討

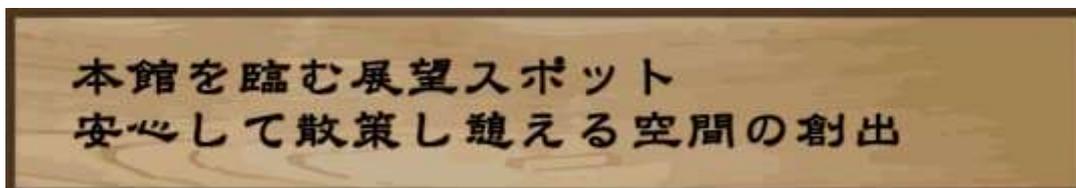
上人坂においては、片側歩道 2.5m を整備することで地中化方式による無電柱化の可能性がある。民間開発の整備にあわせて短期での整備を目指す。



手法		整備主体	施設の位置づけ	費用負担
①電線共同溝方式		道路管理者等	道路付属物	・電線共同溝本体:道路管理者負担 ※電線事業者から負担金を徴収 ・トランス・電線等は電線事業者が負担
電線共同溝方式以外	②自治体管路方式	地方公共団体	道路占用物件	・地中化本体:道路管理者負担 ※電線事業者からの負担金の徴収無 ・トランス・電線等は電線事業者が負担
	③単独地中化方式	電線管理者	道路占用物件	・全額電線管理者が負担
	④要請者負担方式	要請者	道路占用物件	・全額要請者が負担

## (3) 本館・冠山周辺エリア

## ① コンセプト



## □ 本館を臨む展望スポット

道後温泉本館の南側に位置する冠山は適度な標高があり、本館を臨む視点場として、また白鷺坂から本館を臨む借景として、本館と同じく道後温泉の景観を印象づける要素である。既に設置された「空の散歩道」に見られるような展望機能を強化し、本館に訪れた際に気軽に立寄り、本館の眺めを楽しむことができる新たな観光拠点の一つとして冠山を位置づける。

## □ 安心して散策し憩える空間の創出

利用客が安心して冠山にアクセスできるように歩車分離の空間を整備し、観光客や地域住民が道後の風景を見ながら憩うことができる場所とする。

② エリアの位置づけ

冠山は、北側に道後温泉本館、西側に道後商店街・道後温泉駅、南側に道後公園、東側に伊佐爾波神社、上人坂と隣接し、道後温泉地区の主要な観光資源の中心に位置している。

冠山は、観光客の駐車場を有しながら、エリア全体が山状となっていることから、本館や温泉街に対して眺望の良い立地にあり、湯神社等の歴史的資源もあることから、今後、道後温泉地区の回遊性の核となるべく新たな観光拠点の一つとして位置付ける。

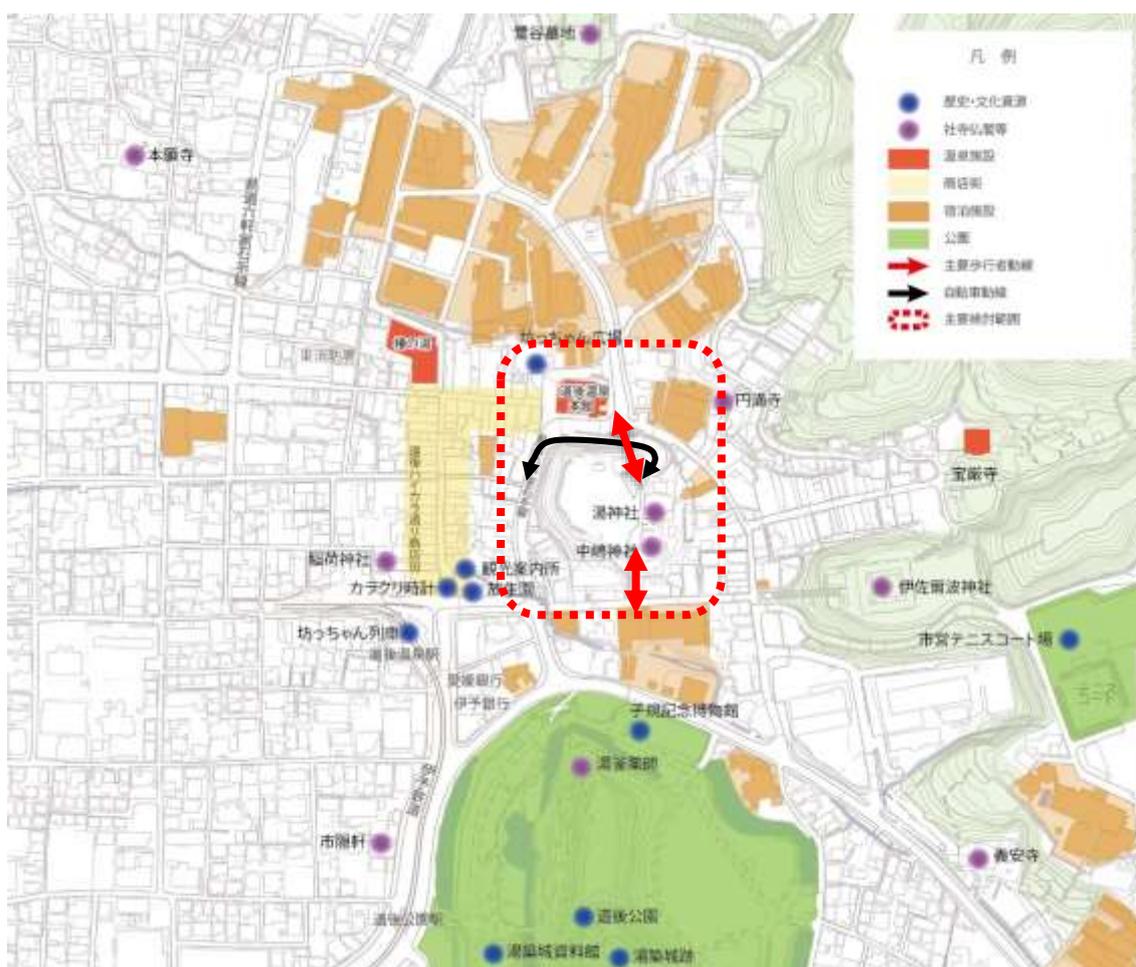


図 31 エリアの位置づけ

### ③ 基本計画

#### 1) 整備方針

現在ある「空の散歩道」の展望機能を強化するため、新たな足湯施設を整備する。冠山の高い視点場から足湯を楽しみながら本館を眺める場所を整備することで、本館保存修復工事の状況や道後温泉本館をさまざまな角度から楽しむことができる空間をつくる。

また、その足湯や冠山山頂に至る歩行者の安全性を確保するため、白鷺坂からの景観に配慮し、階段やスロープなどを整備する。

#### □ 足湯の整備

本館を眺める視点場として法面と平行に設置し、また、雨、風、陽射しを防ぎながら、白鷺坂から見える事務所の威圧感を緩和するための屋根も設置する。

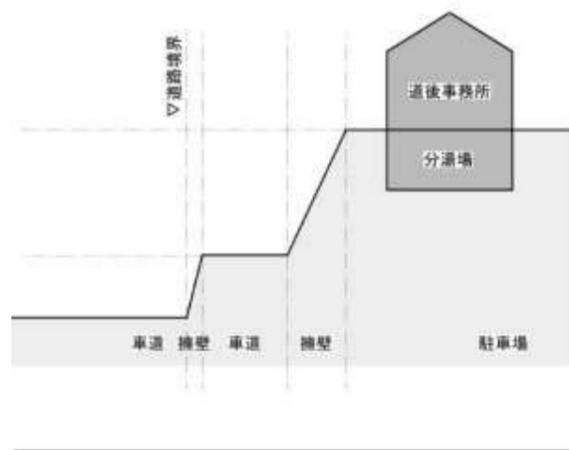
#### □ 歩行者空間の確保

歩車分離によって、安心して散策できる冠山頂上への動線を確保する。

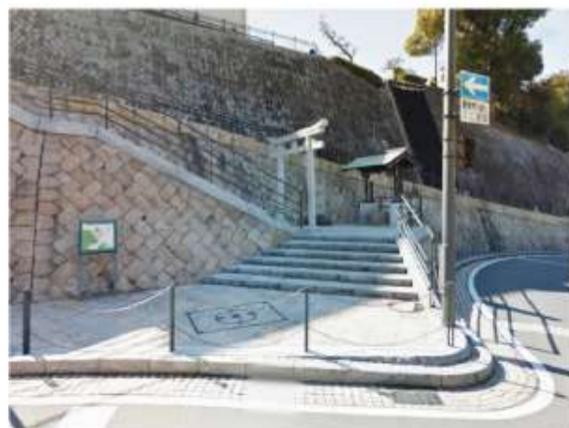
2) 整備イメージ

道後の街を一望できる空の散歩道に、利用客が安心して憩える足湯を整備する。また、歩車分離により冠山に安心して移動できる階段を整備する。

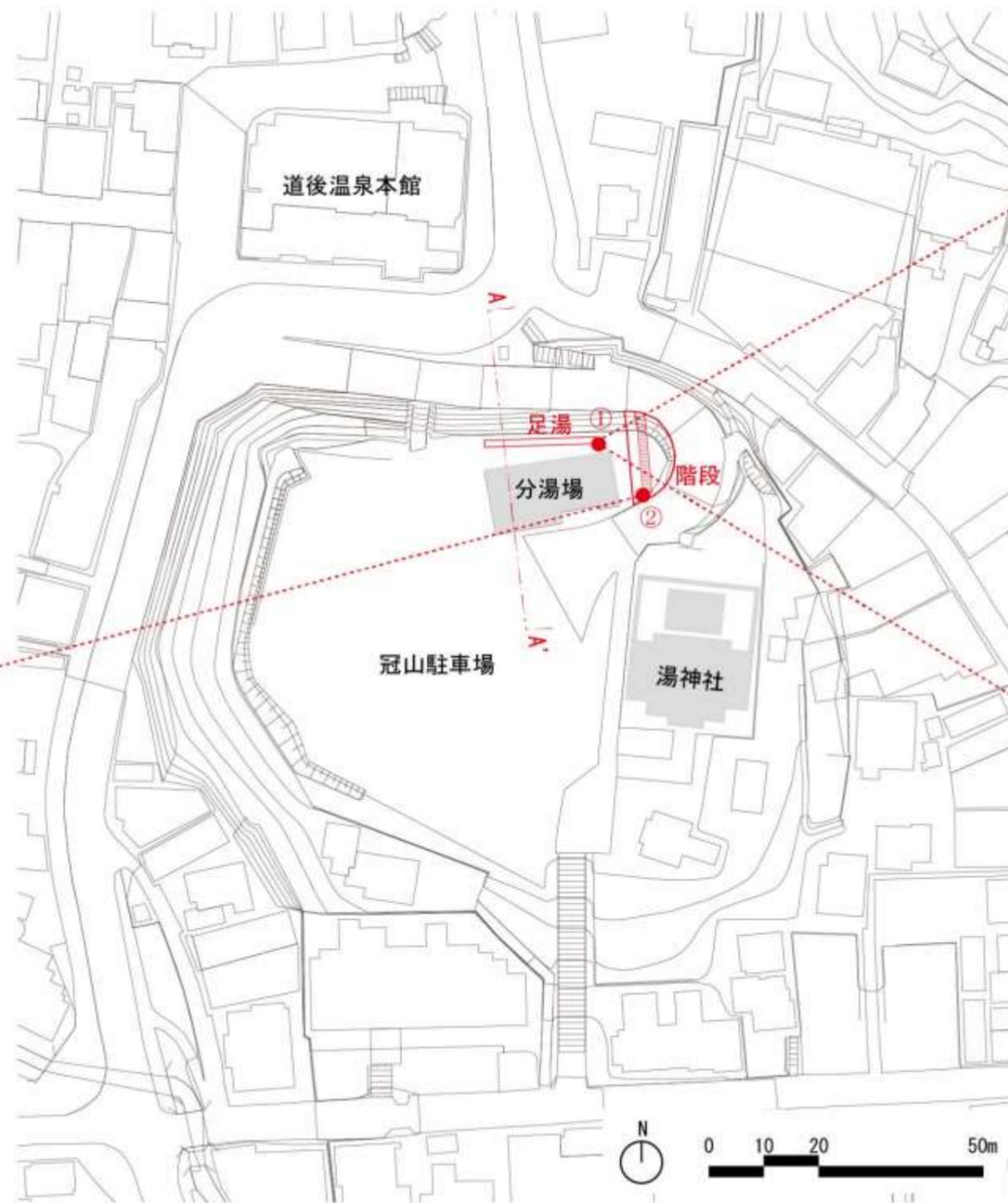
現況 | A-A' 断面図



階段 (道後温泉)



階段を整備することで、歩行者が安心して空の散歩道を散策できる動線を確保する。階段の石材を麓と揃えることで景観に統一性をもたせる。



本館を眺める展望足湯 (萩市)



足湯は斜面の法面と平行とし、本館や道後の市街地を眺めやすくする。

庇 (とらや工房)



事務所から屋根や庇を出すことで、雨や日を除けるという機能に加えて、冠山麓からの景観も改善する。

### 5.3 駐車場・駐輪場

#### ① 駐車場の整備方針

##### 1) 民間資本による駐車場整備の促進

新規に確保する駐車場は、民間資本により整備・運営することを基本とする。その際、現在、公共により整備・運営を行っている冠山駐車場、祝谷東駐車場、臨時駐車場（武道館跡）の一部規模縮小、廃止等を前提とする。

##### 2) 駐車場アクセスの利便性・快適性の向上

駐車場アクセスの利便性・快適性を重視し、「道後温泉本館徒歩5分（300m）圏」内の主要自動車動線上に駐車場を確保する。また、現行の3つの公共駐車場は、どれもアクセス時に急峻な勾配（8%以上）を歩行する必要があることから、新規に整備する駐車場はバリアフリー対応型の駐車場を基本とする。

##### 3) ホテル・旅館の駐車場整備ニーズの考慮

ホテル・旅館のうち、宿泊客の受け入れに十分な駐車場を確保できていない施設が存在することから、利用料金・必要台数等のホテル・旅館側のニーズを把握した上で整備必要台数の把握を行う。

##### 4) 新規開発・本館保存修復工事による観光需要変動の考慮

椿の湯および上人坂周辺の整備により、今後、新規の観光客が来訪する一方、本館保存修復工事期間中は観光客が減少することが想定されることから、各計画案の具体化にあわせて時系列的変動が想定される需要を前提に段階的な整備必要台数の把握を行う。

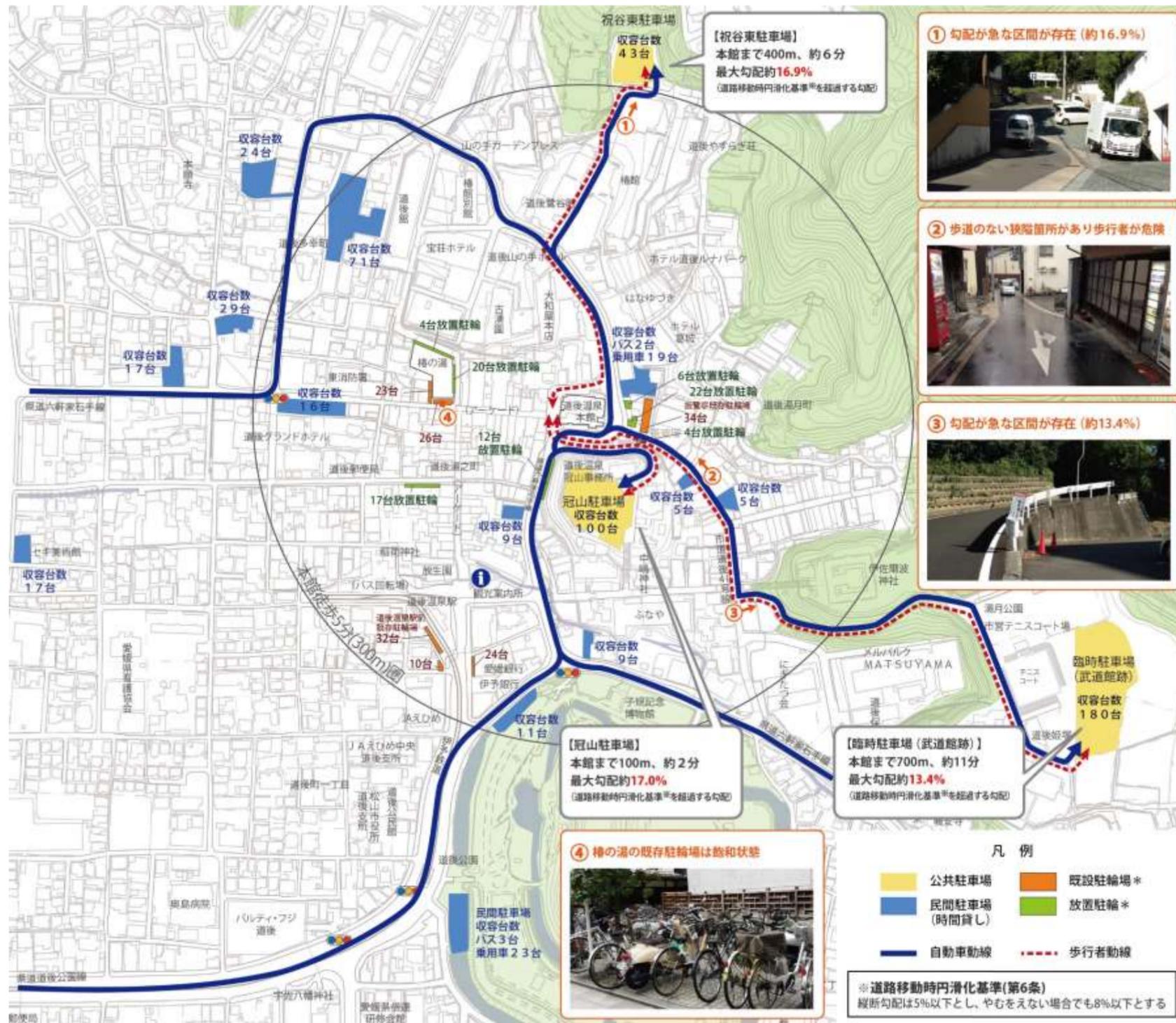
#### ② 駐輪場の整備方針

##### 1) 放置自転車の抑制に資する収容台数の確保

道後温泉内の既存の駐輪場の多くは既に飽和状態にあり、駐輪場以外の敷地に多くの放置駐輪がみられることから、道後温泉全体の駐輪場の収容台数を拡大する。

##### 2) 観光駐車場と一体となった駐輪場の整備

民間資本により整備を行う観光駐車場の候補地周辺に駐輪場施設を設けることで、コミュニティサイクル等の利用も想定した整備を行う。



③ 基本計画

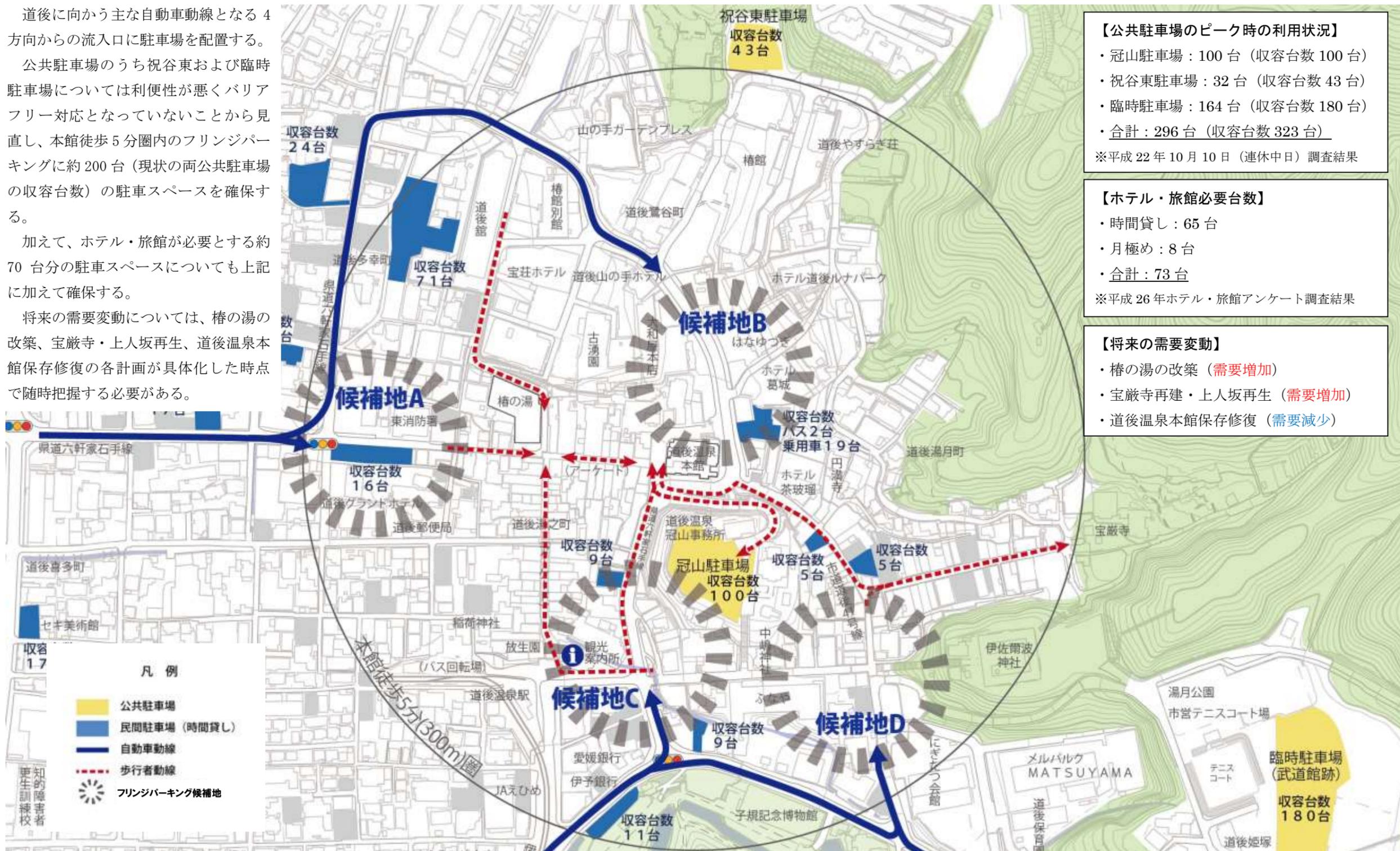
1) 駐車場

道後に向かう主な自動車動線となる4方向からの流入口に駐車場を配置する。

公共駐車場のうち祝谷東および臨時駐車場については利便性が悪くバリアフリー対応となっていないことから見直し、本館徒歩5分圏内のフリンジパーキングに約200台（現状の両公共駐車場の収容台数）の駐車スペースを確保する。

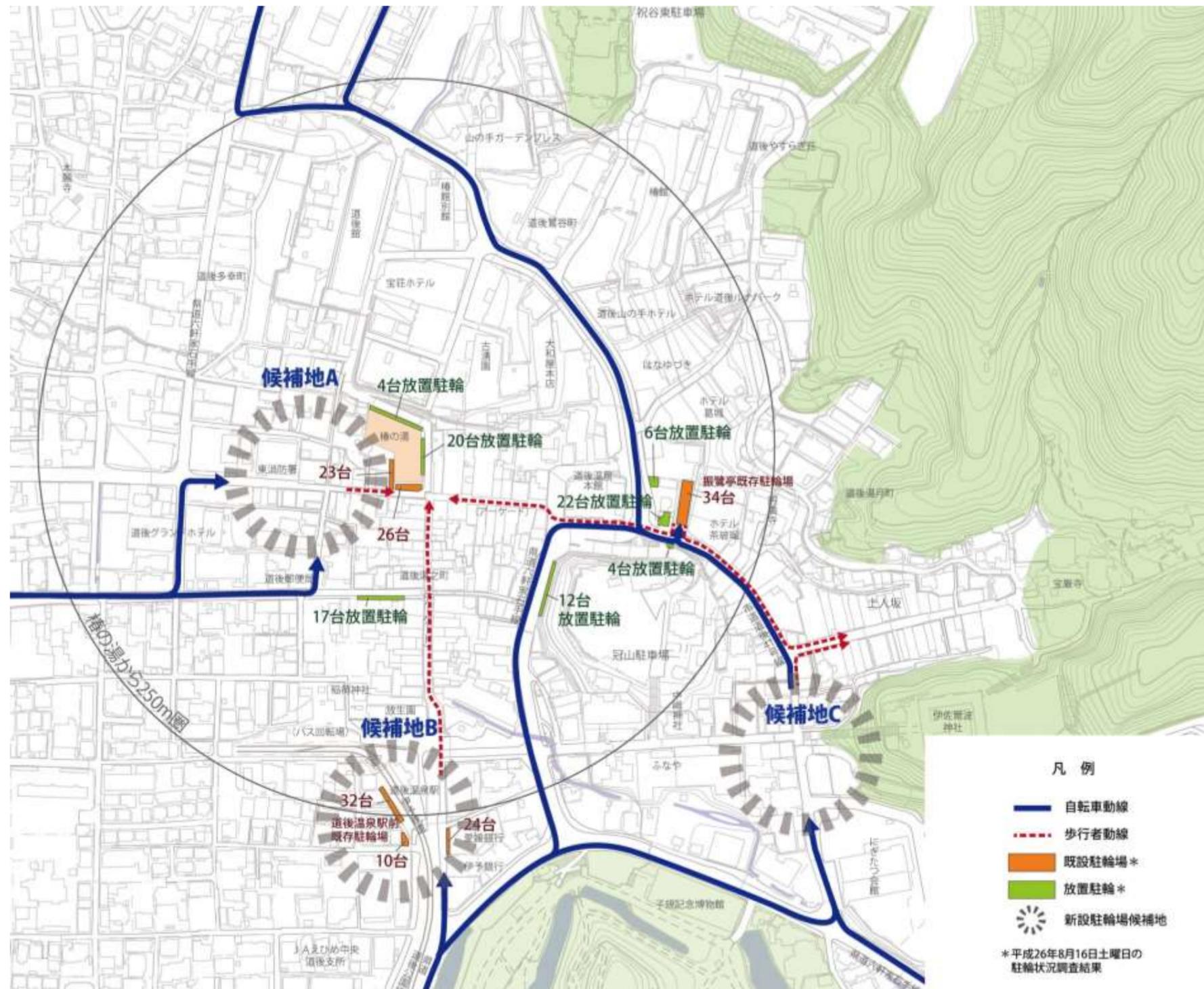
加えて、ホテル・旅館が必要とする約70台分の駐車スペースについても上記に加えて確保する。

将来の需要変動については、椿の湯の改築、宝厳寺・上人坂再生、道後温泉本館保存修復の各計画が具体化した時点で随時把握する必要がある。



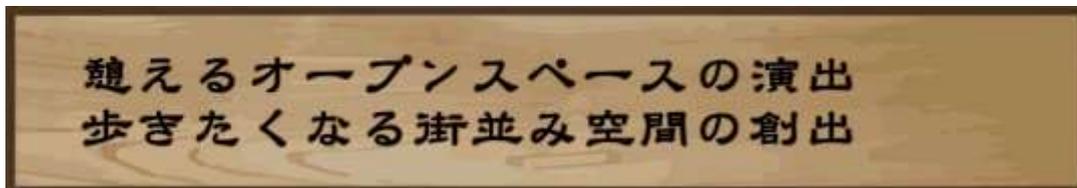
2) 駐輪場

観光ピーク時の放置駐輪は85台。既設駐輪場においても規定の駐輪台数を超える駐輪がある。  
 これらの実態を踏まえて、新規駐輪場の場所や収容台数を設定する。



## 5.4 宿泊施設等耐震改修に伴う景観づくり

### ① コンセプト



#### □ 憩えるオープンスペースの演出

道後温泉地区の複数の宿泊施設等において耐震改修が予定されている。耐震改修は、建築的な構造の補強により外観が変わるため、周辺景観に与える影響も大きい。そのため、施設の外部空間を魅力的につくることで、道後温泉地区全体の魅力を高めることが必要とされる。

そこで、耐震改修に合わせて、前庭空間、オープンテラス、縁側空間など、憩えるオープンスペースを施設外部に設えることで、賑わいを街にしみ出させるようにデザインする。

#### □ 歩きたくなる街並み空間の創出

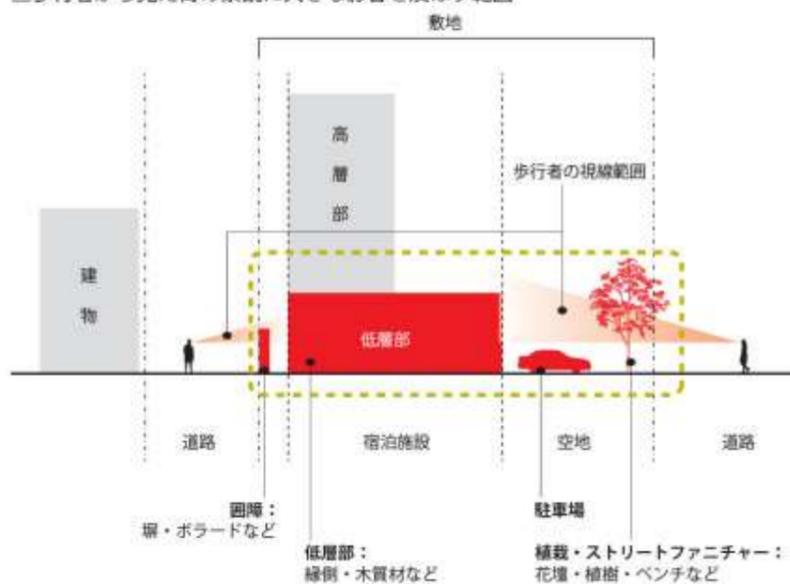
宿泊施設は建築規模が大きく、街並みの景観に及ぼすインパクトも大きいことから、施設前面に設けられた駐車スペースなどが、温泉街としての景観的魅力を下げる可能性がある。

そこで、竹垣・生垣・塀、植栽、石やタイルなどによる舗装、照明付ボラード、駐車場の緑化など、街路からの景観を和らげるように敷地前面部を設えることで、歩きたくなる街並み空間を創出する。

② 宿泊施設等耐震改修に伴う景観づくりの考え方



歩行者から見た街の景観に大きな影響を及ぼす範囲



宿泊施設の建替え・耐震改修を行う場合、**低層部と空地部分**で周辺に配慮した計画が望ましい



瓦+木質外装材：外装材に木質材料を用いることで、親しみやすい建物表情をつくりだす



駐車場の緑化：緑化することで、見せる駐車場をつくる

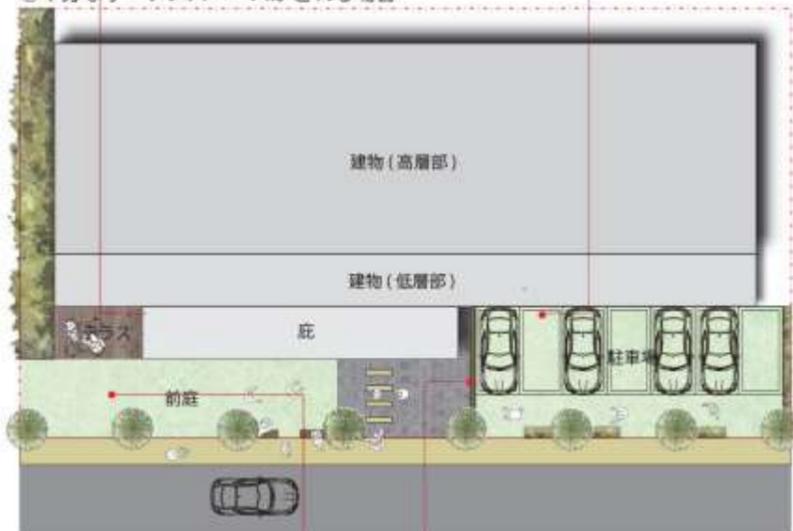


照明付ポラード：温かみのある光で街路を照らす



漆喰・木塀+木製建具：塀によって仕切ること、高級感と落ち着きを感じながら、木製建具によって、街並みの表情を変化させる

①十分なオープンスペースがとれる場合



建物前面に十分なオープンスペースをとることができる場合は、前庭空間やテラス空間、ベンチなどを充実させることで、周辺の景観の魅力を上向きにすることが望ましい。建物前面にどうしても駐車場が必要な場合は、植栽やフェンスによる目隠し、舗装の緑化などを行うなど、周辺景観に配慮することが必要である。



前庭+テラス：オープンカフェ風の設え



植栽+竹垣等：駐車場の目隠しとして和風の設えで周辺景観と調和させる

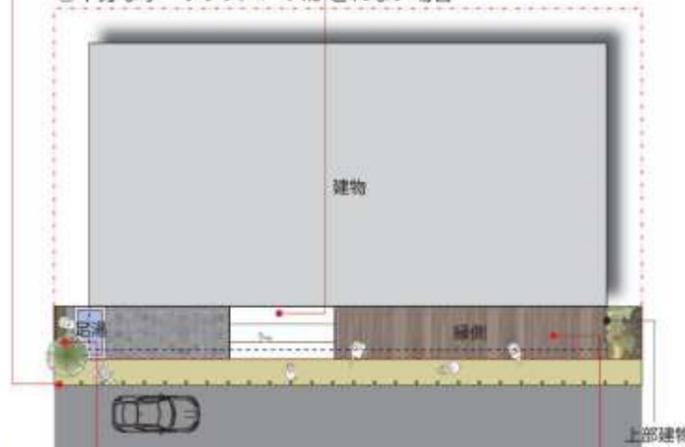


柳+ベンチ+足湯：外湯文化を演出



緑側：施設前の通りに賑わいを演出

②十分なオープンスペースがとれない場合



建物前面に十分なオープンスペースをとることができない場合は、街路に面する大きな建物として圧迫感を与える可能性があるため、1階部のみセットバックするなど緑側や休憩スペースを設けることで、周辺の景観をやわらげることができる。